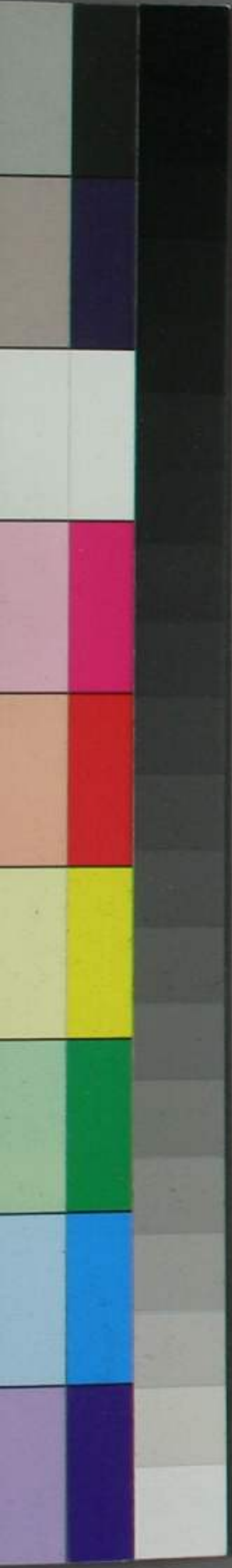


日本書紀訓考

關四郎太註解

七

1590
7





日本書紀訓考七卷

越後國柏崎 關四郎太謹撰

カミヨクダリノカミムツノマキ
神代上六之卷

是後素戔嗚尊之爲行也甚無

狀何則天照大神以天狹田長

田爲御田時素戔嗚尊春則重

○日本書紀訓考七卷

。一

明治
月 年
日 癸未

播種子キマキシ重播チユウハ種子シ此コレ且毀マタア其畔ハナチ

毀キ此コレ云ハ秋アキ則ハ放アメノ天フチ班コマラ駒ミタノ使ナカニ伏ハナチ田チ

波ナ那ツト豆イ秋アキ則ハ放アメノ天フチ班コマラ駒ミタノ使ナカニ伏ハナチ田チ

中復見天照大神當新嘗時則フセマタアマテラスオホミカミオホニヘキコシメストキノソノ

陰放屣於新宮又見天照大神ニヒミヤニヒソカニクソマリチラシキマタアマテラスオホミカミカムミノ

方織神衣居齋服殿則剥天班オルヲミタマハムトテイミハタドノニマシマセルトキノアタフチコマラサカハギニ

駒穿殿費而投納是時天照大ハギテソノハタドノムネヲウガチテナゲイレタマフカレアマテラスオホミ

神驚動以梭傷身カミオドロキマシロミヒニテミイタミタマヒキ

是後注下ふ毛と云言を添て訓べし、○為行ハ、次一書
行と美志和射と訓べし、意ハ字の如くみ、其所為と
云詞あり、古事記ハ須佐之男命大氣津比賣と殺一給
ふ處ハ立伺其態元真集ハ世みか似て物思ふみらふ
と何人○無狀ハ、阿臈幾那志と訓て、上訓考四出○
何則ハ、曾波ハ以加カ尔ニ登ト云ニ尔ニと訓べし、曾波ハ、其ハと云

辭以加^{イカニ}尔^ニと云、下の種々此事^{クサク}指^シて云、詞ありはく古
 事記傳八十二^丁ふ、此段論^{アキラ}ふべき事^{コト}何^ニ久^ク須^ス佐^サ之^ノ男^ヲ命^メ
 既^レ不^レ御^ミ誓^ケ不^レ依^レて、御心^ノの清明事^{アキラキ}顯^ス也^ト、我^レ勝^トと天照大神^ニ
 と許諾^{ウケテ}賜^ハつべき、此時既^レ不^レ御^ミ心^ノ乃^チ清明事^{アキラキ}疑^ハる^ル然^レる
 不^レ忽^チ又^チ如此^ク天照大神^ニ乃^チ御^ミ爲^ス不^レ種^々此^レ惡^シ事^ト也^ト、古^レ來^ル給^フ
 不^レ如何^ニ也^ト、此^レ趣^サ書紀^ノの傳^ハ共^ニ也^ト皆^レ同^シ事^ト也^ト、注^ス者
 心^トと著^シる^ル也^ト、如何^ニ也^ト論^ハあまの^ニ麗^キ
 ありたり、余^ハ其^レ心得^ル事^トふこと思^フへ、故^レ按^テ書紀^ノ
 中^ノの一^ノ傳^ハ不^レ右^ニ此^レ種^々此^レ惡^シ事^ト初^メ不^レ有^リて、はく石屋^ノの事
 也^ト、此^レ神^ノ不^レ解^レ除^レと耕^テ逐^テ一^ノ事^ト有^リて、後^ニ天照大神^ノ不^レ
 相見^給給^ハわく^ルて、高天原^ノ上^ニ給^フ給^ハわく^ル彼^レ御^ミ誓^ケの事^ト也^ト

り此^レ次第^{コト}然^ルる^ル思^ハはる^ル也^ト、此^レ不^レ依^レて按^テ古^レ事
記^ス又^チ書紀^ノの餘^ハ傳^ハハ
 事^ト初^メ次第^ノ前^ニと後^ニと何^レ、此^レ説^ハはる^ル也^ト、然^ルる時^ニ此^レ
 と乱^ルつ^ル也^ト、初^メ此^レ是^レ後^ニと書^キ出^サされ^ル、加^レ禮^スと云^フ古^レ々^ニ也^ト、訓^ベ
 一^ノ、○以^テ天^ノ狹^ク田^ノ長^ク田^ノ爲^シ御^ミ田^ト、漢^ノ文^ノ不^レ書^キ一^ノを御^ミ田^ト天^ノ
狹^ク田^ノ長^ク田^ノ介^トと訓^ベて、爲^シ捨^テづ、はく上^ニ月^ノ讀^ミ尊^ニ保^シ食^ス
神^トと殺^シ給^フ、其^レ神^ノの御^ミ體^ハ不^レ生^リ、稻^ノ種^トと始^メ殖^ス于^テ天^ノ狹^ク
田^ノ及^チ長^ク田^ノと何^レ、元^ノ來^ル天照大神^ノ御^ミ田^トあり、○時^ニよ
り五^ノ字^ヲ捨^テづ、○春^ニと云^フ意^ハ、通^シ證^ス四^ノ、廿^三ふ發^ス出^ス
則^チ捨^テづ、○重^シ播^キ種^ト子^ノの訓^ハ注^スはる^ル重^シ字^ノの如^ク、下^ニ六
卷^ノ九^ノ、是^レ神^ノ風^ノ伊^ノ勢^ノ國^ノ則^チ常^ニ世^ニ之^レ浪^ト重^シ浪^ト歸^ル國^也、不^レ葉^ス十

傳八の十八丁十七の八丁十七丁、物と見も聞も知も
 食と、他の物と身も受入る。故も見も聞も知も
 と食も通も云、事多し。君の御國と治り
 とも聞も聞食も申あり、云、身も受入て保意
 何せ、あり、此の新嘗と食給ふを幾古志と云、又米須
 と云、米の見と、是、其、事と身と何、久、此、幾古
 須、見、字、書、き、が、當、き、り、又、當、天、照、大、神、新、嘗、時、見、之、
 とらそ有る。○新宮の、同傳八丁九丁、此、料、新、宮、也、
 造、給、ふ、事、と、何、り、○陰、下、一、書、も、陰、自、送、日、神、不、知、
 云、云、と、何、り、比、曾、加、爾、と、訓、べ、し、紀、中、小、潛、竊、願、盜、願、を
 どと訓り、其中志奴毘と訓る處、万葉二十四丁、但
 何、久、此、二、の、相、通、つ、る、あり、

馬皇女在高市皇子宮時竊接穗積皇子云云と何り、此
 の天照大神の、知、食、を、ぬ、り、ま、り、給、ふ、と、云、辭、を
 り、○放屎の、古事記も、其、聞、食、大、嘗、之、殿、屎、麻、理、散、下、
 書、も、陰、自、送、糞、送、糞、此、云、俱、蕪、摩、屢、と、何、り、依、て、久
 曾、麻、利、知、良、志、幾、と、訓、べ、し、放、の、知、良、須、あり、万葉十六
 十八丁、屎、遠、麻、礼、竹、取、物、語、も、燕、の、ま、ま、わ、り、久、舊、屎、を
 ど見、え、上、段、黄、泉、も、放、屍、此、云、愈、磨、理、と、何、り、磨、理、の、其、爲
 行、と、云、訓、考、四、卷、屎、も、上、同、同、卷、四、丁、出、古、事、記、傳、八、
 如此、清、き、新、宮、も、わ、穢、た、象、行、爲、給、ふ、暴、惡、給、ふ
 事、此、甚、し、き、形、り、と、何、り、古、事、記、上、の、故、雖、然、爲、天、照、
 連、き、

大御神者登賀米受而告如尿醉而吐散登許曾我那勢
之命爲如此又離田之阿埋溝者地矣阿多良斯登許曾
我那勢之命爲如此登詔雖直猶其惡態不止轉と何系
と此の略きとあり○方の捨て○神衣の同傳八十三
加牟美曾と訓べし神奉り給ふ御衣ありの御手自
織給ふる非衣織女とて織り給ふる御手自
ル其服屋に坐て事と看行そり神事と重々給ふ故
ル行て者行そり自 此大神の祭給ふ神と天神と云
了説のよ移しとあり衣織女とて何系とて何事
服殿而織神御服也○居齋服殿服の波多と訓べし
と何系衣織女あり○居齋服殿服の波多と訓べし
意の羽手も手衣と云なりと新井君云久居の

麻志麻勢流と訓べしき齋とい古事記傳八小神御
衣と織殿なり故に萬と齋慎故ありと何久古事記曰
天照大御神坐忌服屋而令織神御衣之時とあり○剝
の同記に逆剝剝而下逆剝と何系小依り佐加波疑爾
波疑互と訓べし此事祝詞考其皮と剝と云とあり
古事記傳と逆の方より皮と剝とみ出○殿覺の今本殿
ラカと訓る御在所と云事あり聞えとせとあり
る處の然訓る御在所と云事あり聞えとせとあり
屋脊曰豊和名伊良節と何系と元刺の古名波多殿
み々ありて佛書より出た言なりと云とあり
能牟禰と訓べし古事記に其服屋之頂とあり牟禰の
和名抄具宅小棟和名無禰字鏡小楹楹上横豆者也棟

也牟禰と何久殿の上の服字を略る○穿ハ、下三卷も
 穿邑此云干介知能務羅此紀の常ありと何久訓ふ依へし猶此言其
 ○投納古事記ル所墮入ト出○動ハ捨て、○梭ハ、
 今本カイと訓ふ、古事記傳ハの十五丁ハ、御梭の意
 心得て後人のさかへ改あり、昔の片假美比と
 名ふミとアと書し例多し心得置べしと何久、美比と
 訓べし和名抄織機具、通俗文云杼者機之持緯者也、和
 名比亦謂之梭、今按杼杼字也、字鏡ハ杼杼、緝織比伊と
 何久此伊ハ字と添○以へ返りて、爾互と訓べし、○傷
 身ハ、此文聞え然了故ハ、服織者々を梭を持物おれ、
 大神ハ其側ハ居坐了ハ、梭の御身不當了ハ、由何れ

故古事記と下、一書ハ、衣織女の事ハ何久と、此ハ略
 ぬき、又ハ衣織者の三字脱ハ、次文ハ、由是發愠
 給ハ、云事ハ思ひ滑るハ、此暴惡今ハ下、一書ハ
 心得置べし、其ハ書ハ、推日女、尊の驚而墮、古事記曰、
 天衣織女見驚而於梭機以所持、梭傷身而神退矣、
 衝陰上而死と何久、
 コレニヨリテ、ミイカリマレテ、アメノイハヤニイリ、マレ、イハトラ
 由此發愠、乃入于天石窟閉磐
 戸而幽居焉、故六合之内常闇

小刺許母理と云辭何きバなり此の多互とも佐須も
 此字のつりきバ佐志互と云づ退置戸と持來
 閉塞佐須ハ其戸小物と刺て堅ちる○幽ハ捨て
 云と同傳ハの十六丁より○幽ハ捨て
 居ハ古事記ハ許母理坐也と何る○
 六合之内ハ上ハみもかく何ると阿米都知と訓たき
 ども此と同記ハ高天原皆閻葦原中國悉聞と何る○
 依ハ天原母葦原中津國母と訓べハあち次の種々乃
 事ハ皆天より何の事あれバなり○
 事此紀ハ天より○常閻同記ハ云云○因此而常夜往と
 語き事あり○常閻同記ハ云云○因此而常夜往と
 何る小同ハ登古夜美と訓べト下一書みち天下恒閻

無復盡夜之殊と何ハ常閻とハ古事記傳八丁○
訓考六出夜美ハ上
 小黃泉と何る填ハ夜不通ハセあり○第五音の
 第一音ハ轉きり例ハ登表々登表々ハ物の撓む
 云万葉廿九丁ハ白杜我枝母等乎々爾と何ると又
 或云枝毛多和多和と何る又古事記ハ御頸珠之玉緒
 母由良爾と何る母由良ハ眞響と云事なり○万葉
 二卅三丁人麻呂朝臣長歌ハ天雲乎日之目毛不令見常閻爾覆賜
 而十五丁ハ安波牟日乎其日等之良受等許也未爾
 伊豆礼能日麻呂安礼古非乎良牟○常閻と云例ハ

り。○晝夜之相代晝夜ハ古事記火照命の申ふ、自今以後爲汝命之晝夜守護人而仕奉此紀あり此と初より
 下丁廿九卷一丁十七卷一丁廿一卷二丁十三卷九
 十五卷三丁十六卷六丁廿一卷五丁とい書夜とも日夜と
 る何人、是と古事記傳十七余流比流と訓べ
の宣命も古書皆めくめ如しと何人又相代も同傳八
丁和幾多米と何人從下七卷十五丁東夷め
父子無別十卷武内宿禰と云了處辨無罪
る皆一事分たぬと云此辭和幾に分る多
 米ハ辭下九卷十丁適此時也晝暗如夜已經

多日時人曰常世行之也と云事何人○八十萬神ハ古
 事記万葉ある八百萬神五百萬神と何人ら
 たる數の多き至極と云八十萬神と何人ら
ある故有べし若ハ八百と云事と謙遜賜
何人らと何人又玉勝間九と古事記と初り古書共
みも皆八百萬神と云多を常た此紀あり
はづこあはく八十萬神と有八百萬神と何人處ハ見
えはあわいのかは撰者の心有事と見
はるかやうの類も神名物名地名や何人後世
書どかハ大方書紀依た此稱ハ書
紀よ今世至るハ八百萬神との云
らと河邊ハ加波良と訓事上十三丁
出會合ハ加牟都杼比都杼比豆と訓べ古事記ハ
 神集集而何人○可禱之方之捨べ万葉二六

八、哭澤之神社爾三輪須惠雖禱祈十五丁廿四、天地之
神尾母吾者禱而寸十九丁卅四、倭文幣乎手爾取持而
離等和礼波雖禱廿八丁卅八、阿米都知乃可美乎伊乃里
互又丁卅二、阿米都之乃以都例乃可美乎以乃良婆加
ど何久通證四丁廿七、谷重遠曰意ハ言宣也と云りと
出、伊比の切伊あれ古事記あり、天兒屋命布刀詔戸言
禱白而と何久又方ハ佐麻と訓べし此言ハ其物其言
と指て云あり、催馬樂上丁十、あハ體とと訓りけし此ハ
大神の石窟より出坐む方と如何ありしと云むと相
計て、下の種々の事と調て、石窟の前より申を詞と禱

と云、形久○計ハ、字と略き大祓詞ハ皇親神漏岐神
漏美乃命以氏八百萬神等乎神集集賜比神議賜賜而
万葉二丁廿七、久方之、天河原爾八百萬千萬神之神集
集座而神分分之時りど何久依て神波加利爾波加
流と訓べし、次、文ハ立磐戸之側と何久立と、効クリタ
も、依りて添て讀事あり、されば此の計、けし波加利ハ古事記
傳廿四丁卅一、人ハ相談ハ論ハ出、○思兼神名義同傳
八丁廿二、智ハ一ハ思慮ハ兼持ハ數人の思慮ハ出、○深謀ハ
下の種々乃事ハ思兼神乃思慮せり、○遂ハ、山
陰ハ、遂字ハ、思慮ハ終り、云事形久古事記、御幸ハ
かどとあり、

然遂纒相易又假名不見え、高津宮段建内歌、那
加美古夜都昆爾斯良羊等万葉廿ふ須惠都比爾やど
り、○常世トヨヨ、ナガナキドリ之長鳴鳥ハ古事記傳八丁一ふ常世トヨヨと云
事長鳴鳥ハ鷄ニ鳴聲ハ絶レて長鳴と云ハ凡ニて鷄ハ他ニ出ル○
鳥ハより鳴聲ハ絶レて長鳴と云ハ凡ニて鷄ハ他ニ出ル○
手力雄神此神乃事末ふ云べし、○磐戸之側、磐戸ハ上
ふ出ルと云ハ以波登ハと訓ルる石窟ハと何レる續ハ形ハ也
り、此ハ古事記ハ石屋戸ハと何レるふ依リて、以波也登ハと訓
べし、石窟ハふ閉テたる戸と云、事形久又側と和幾と訓
ハ同記ハ戸掖ハと何レるふ依リ、○立ハ、今本ハ加久礼多
都ハと何レるハ、古事記ハ、隱立ハと何レるを取リて、何レるべし

但ハ加久礼ハ加久利ハと云べし、古言形、○中臣連ハ
同傳十五五丁五中五取五臣五茂五樺五中五取五持五玉五台五記五別五記五小五茂五槍五中五奉五
入レ時ハ祝詞ハ大ニ中ニ臣ニ茂ニ樺ニ中ニ取ニ持ニ玉ニ台ニ記ニ別ニ記ニ小ニ茂ニ槍ニ中ニ奉ニ
執レ持ル玉ハ奉仕留中臣云云、何レる如ク、祖神ハより神ト
職ハ業ハと取ル中ニと取ル地ハ名ハ不レ因ルと、祖名ハと取ルと、又事ハ
取ル物ハと取ル中ニと取ル姓ハ中ニと、此中出、此、氏人の事ハ
紀中ハ處々出ルたるふ云べし、○遠祖ハ、紀中ハ上祖本
祖始祖とも書ル、皆登保都於夜と訓べし、万葉十八一廿
丁ハ、大伴家持卿己ハ祖と、大伴能遠神祖と詠まじり、
和名抄ハ父ハ母ハハ高祖父、爾雅云曾祖王父之考ハ高祖王
父、日本紀云上祖和名止保豆於夜と何レる、遠祖と何レる

夜と訓久、あち於夜、始祖を言、事なり。○
天兒屋命ハ古事記傳八廿九、名義ハ此招祖泥、致其
祈禱焉と云、古事記ハ天兒屋命、詔戸言申、詔戸言禱、而
奉り、一書興、台産靈、何處云、考、出、屋と
夜泥と云、事ハ、今此俗言、此、万葉四、も、何り
と云き、○忌部ハ、同傳十五、九、丁、伊牟倍と訓べ
、諸の忌部と、率、其、長、造、り、又、き、ら、で、も、總、て、忌
、神、と、祭、種、々、の、物、を、造、り、又、き、ら、で、も、總、て、忌
、瀧、生、り、て、事、と、名、り、と、出、鏡、作、部、と、何、處、云、べ、し、
古語拾遺ハ、忌部、諸氏、と、何、り、ハ、同書ハ、太命、所、率、神、名
曰、天、日、鷲、命、阿、波、國、忌、部、祖、也、手、置、帆、負、命、讚、岐、國、忌、
彦、狹、知、命、

紀伊國、忌、天、目、一、箇、命、筑紫、伊勢、兩、國、忌、部、祖、也、
共ハ、忌、部、と、云、ハ、長、上、の、姓、と、等、し、ハ、共、ハ、忌、潔、清、了、
者、と、忌、部、と、云、ハ、其、國、乃、群、と、一、ハ、總、司、了、神、等、ハ、
太、玉、命、ハ、又、此、神、等、と、主、了、神、乃、り、又、按、ハ、中、臣、氏、ハ、兒
と、其、子、孫、ハ、何、ら、ぬ、と、中、臣、と、云、ハ、忌、部、ハ、此、類、ハ、何
と、違、ハ、何、り、又、神、代、より、中、臣、と、並、ひ、ハ、何、職、ハ、何、り、
淨、世、より、脱、テ、衰、ハ、た、多、事、古、語、拾、遺、ハ、委、く、見、也、
○首、ハ、今、本、ハ、何、ハ、按、ハ、諸、氏、ハ、皆、姓、と、云、ハ、此、ハ、姓
と、云、ハ、何、ハ、脱、セ、ハ、何、り、故、今、加、ハ、つ、意、ハ、古、事、記、傳、九
四、十、ハ、大、人、の、意、出、○太、玉、命、ハ、古、事、記、傳、八、廿、九、ハ、名、
七、丁、ハ、何、り、と、

未だ考む若し太玉神の意ありや何ら出はく餘神又
むけく玉串の名の乎向神なりと云ふと出はく餘神又
の地名天香山那どみも天と云ふ冠らせし此神小
流と古書も天と云ふ故何事なり久又の古よ
り云傳し傳ふあや何らむ猶考べし○天香山の同傳
八丁ふ阿米能迦具山と訓べしある天ふ何れ地名を
りと出○真坂樹真の稱と云ふ言坂樹の仙覺万葉集
抄ふ榮た多樹と云事なりと云ふ此樹の事冠辞考ま
の本一の木は名あり何らぞた常葉なる木と神事
公事ふ讚稱も真坂樹と云ふなりそが中ふ取分て鏡
辭と云物ふ何ら警華と指ありとせし鏡の久後世は
云物ふ何ら警華と指ありとせし鏡の久後世は
漢語抄龍眼佐加木今按龍眼の三字佐加木和名抄ふも
漢語抄龍眼佐加木今按龍眼の三字佐加木和名抄ふも

と云き主観落葉ふ是ら上代の坂樹の何ら後荒木田
久老主観落葉ふ是ら上代の坂樹の何ら後荒木田
と成り法渡り後佛ふ備つる久の佛の物
深山あり万葉廿ふ於久夜麻能之伎我波奈能と詠
と云ふ橘を用うと云ふ此物と佛ふ奉事なり枕草紙
りき那多物段ふ橘の枝と折るも云きなるなど尊
きり那多物段ふ橘の枝と折るも云きなるなど尊
峻美香木也と何ら香何物と聞えきき佛み
奉りし法此紀又古事記も檀原宮段大御歌ふ
伊智佐介幾未迺と何ら和名抄類ふ杓漢語抄云比
佐加木と何ら木なり是ぞ上代ふ坂樹と云ふ木なり
べき古事記傳十九の廿一丁ふ是ふ大小二種なり云
云小の方の儀く叢がり生るそのなり久大の方の

木もや、大きく、皆常葉、下訓考十六、ふも云、下、一
 形、このありと有り、
 書、五百箇、眞坂樹、八十玉籤、と有り、今持了木と籤
 と、云、掘、て建了故、云、形、○掘、而、古事記、
 根許士爾許士、而、何、多、依、て訓、べ、此、言、同、傳、八、
 丁、云、根、引、ら、掘、取、と、云、俗、出、古語、拾遺、掘、ハ、佐、
 居、自、能、祢、居、自、と、見、え、万、葉、八、十四、去、年、春、伊、許、自、而、
 植、之、吾、屋、外、之、若、樹、梅、者、花、咲、爾、家、里、古、今、六、帖、秋、の
 野、ハ、根、許、士、あ、り、て、持、ぬ、と、も、巖、の、種、ハ、遺、し、や、い、せ
 ぬ、○上、枝、中、枝、下、枝、ハ、古、事、記、譽、田、天、皇、大、御、歌、又、長、谷
 朝、倉、宮、段、三、重、姝、歌、ハ、本、都、延、那、加、都、延、志、豆、延、と、有、り

小、依、て、訓、べ、○八、咫、鏡、咫、ハ、先、同、記、小、訓、咫、阿、多、と、何
 多、カ、賀、美、と、訓、べ、此、咫、ハ、同、傳、八、咫、五、丁、咫、ハ、借
 形、也、と、何、家、花、崎、阿、多、所、と、然、云、べ、ハ、頭、花、嶺、八、葉
 此、と、同、ハ、頭、ハ、阿、多、麻、の、意、形、ハ、咫、駿、ハ、借、字、ハ、
 八、咫、と、云、ハ、意、と、多、時、ハ、二、卷、猿、田、彦、神、と、云、其
 寸、咫、と、云、ハ、事、ハ、久、漢、書、ハ、皇、國、ハ、用、形、ハ、八、寸、也、と、注、
 重、遠、ハ、是、と、取、て、七、咫、ハ、五、尺、六、寸、形、ハ、と、云、ハ、
 猿、田、彦、神、の、鼻、長、く、ハ、云、ハ、と、云、ハ、此、御、鏡、の
 度、ハ、ハ、手、形、ハ、此、手、と、多、ハ、通、ハ、せ、と、云、ハ、形、ハ、
 合、ハ、ハ、手、形、ハ、此、手、と、多、ハ、通、ハ、せ、と、云、ハ、形、ハ、

十掬あど有り、さきハ二手と合せ、ハ量らばり、非
故上ハ平田氏、四寸ニ並、云云と云き、ハ非
事と思ふ、さき下二、卷ハ猿田彦、神鼻長七尺と有り、
右の格、此事ハ訓考十一、卷又十、卷ハ的臣祖盾人
宿禰鐵的、射通セ、依、賜名、的、戸田宿禰、
戸田ハ古事記傳世二の卅七丁ハ此、人始、
誤、形ハ初、名、戸田ハ此、時ハ此、時ハ此、
人ハ元、より、名、此、時、十、尺、表、の、切、登、
賜、
其、的、の、幅、十、寸、位、有、
的、の、形、を、以、て、名、を、賜、
然、
此、稱、盾、
的、
由、縁、
是、
尺、

云、古言の遺、ハ十寸位と十尺との云、
八尺十尺の餘、ハ、
尺と云、事ハ見え、
真經津鏡と云けむ、
一、手、
形、
下、七、卷、
鏡、
有、
鏡、
例、
云、
○日本書紀訓考七卷
十九

天目一箇神と何多神の御名より出づるべし此考
十ニ卷三十〇青和幣古語拾遺令長白羽神種
麻以爲青和幣古語と何久古事記傳八四十木綿麻
の類と總云名ありと云せり此物の本義あり何ら必青
和幣も是合せり按ふ白和幣の穀と麻と二種と總
て木綿と云りと思ひぬ又式やどみ其料の物と
舉ち多處あり木綿と麻とと出せぬ其を用ふる處
ぬが多きも二種と合せり木綿と云ありと出〇白和
幣古事記あり青丹寸手白丹寸手下一書あり栗國忌
部遠祖天日鷲所作木綿と何り古語拾遺あり令天日

鷲神以津咋見神此神の此入此文多あり又
穀水種殖之以作白和幣豐後國風土記常取袴皮ヲ
以造木綿又寶基本紀あり謂以穀木作白和幣名號木
綿形ど見えり古事記傳八是ら見る白和幣
ハ木綿の事木綿ハ穀木皮以て織了布あり古ハ普
用る物なり今世ハ木綿と云木大小種あり其小
大形あり是ハ木綿と云異形あり字の同き以
て思ひ清そち白き物多故白多問白自由布
と云白余伎豆と云形あり白和幣青和幣共織
て古書あり木綿や作と云て織と用と見と手向

子思兼神令思而集常世長鳴鳥令鳴而取天安河之河
上之天堅石取天香山之鐵而求鍛人天津麻羅而料伊
斯許理度賣命令作鏡料玉祖命令作八尺勾瓏之五百
津之御須麻流之珠而召天兒屋命布刀玉命而内拔天
香山之眞男鹿之肩拔而取天香山之天波々迦而令占
合麻迦那波而天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許
士而於上枝取著八尺勾瓏之五百津之御須麻流之玉
於中枝取繫八尺鏡於下枝取垂白丹寸手青丹寸手而
此種々物者布刀玉命布刀御幣登取持而天兒屋命布
刀詔戸言禱白而と何久下一書少ハ鏡と作事と幣

又玉と作事又其と繫玉鏡と作事り何り此
少ハ略せしり何り此ハ相與祈禱と何きども太玉命
ハ三種の物と取繫坂樹と取持ハ祈禱白を天兒
屋命形系と如此云ハ二柱神の事業と一ハ籠て云
何り又古事記傳ハ今祈禱ハ何事と白せると云ハ
云云彼太玉命の取持了種々乃御幣物と稱賛た多辭
何りづハ何り然稱賛白を大神の出坐む事と乞願
意少を爲了事何り故ハ禱字ハ稱賛了意と乞祈意と
と兼たきハ祈疑と何訓り何り何り
久下一書ハ廣厚稱辭祈啓と何り

又マタ猿サル女メノ君キミ遠ト祖ホツ天アメノ鈿ウズ女メノ命ミコト則ミテニ手テ
 持チ茅マキノ纏ホコ之モチ稍アメノ立イハ於ヤド天マヘ石ニ窟タ戸シ之
 前テ巧タク作ミニ俳ニ優ワ亦サ以キ天マタ香アメノ山カ之グ真ヤマ
 坂サカ樹キ為ヲ髮カ以ヅ蘿ラ比コレ舸ハ礙ヒ為タ手スキ繼ト
 而レ火キ處ヲ燒タ覆キ槽ウ此コレ云バ
多須ス枳ト此コレ云バ

于ゲ置フ顯セ神テ明カ之ム憑ガ談リ顯ク神シ明ム之イ
 歌ム牟ガ鵝リ是コ時ニ天アマ照テ大ラ神ス聞オ之ホ而ミ可カ梨レ
 曰オ吾モ比ホ閉サ居ク石レ窟コ謂ニ當モ豐リ葦ヲ原リ
 中ナ國カ必ク為ニ長ト夜ヨ云カ何ム天イ鈿カ女ア命メ
 嘒カ樂ク如エ此ラ者ギ乎ア乃ズ以ト御オ手モ細チ開テ

磐戶窺之メニヒラキテノゾマラス時手力雄神トキニタチカラヲノカミ則奉承アマテラス
 天照大神之手引オホミカミノミテヲトリテヒキ而奉出イタヒツリキカレ於是
 中臣神忌部神アメノコヤネノミコトフトタマノミコト則界以端出之レリクメナハラヒキワタ
 繩シテ亦マタ云ヒダリ左ナハトイフ繩端出之タムシユツ乃請コヨリ
 此コレバ云シ斯梨ク俱メ梅ナ難ハ皮イフ之イフ繩ヒヨウ乃請コヨリ
 曰勿復還幸然後諸神歸罪過ウチニナカヘリイリマシトマラレキソノノチカミタチスヤノヲ

於素戔鳴尊而科之ノミコトニツミフヨセテ以千座置クラオキドヲオホ
 戶セ遂促徵矣セメハタリテ至使拔髮ミカミヲヌカレメテ以贖其ソクツミヲカ
 罪亦曰拔其手足之爪贖之メハセキマタソクミテトミアシノツメラモヌキテアガハセシトモイフ己カクレ
 而竟逐降焉テツヒニカムヤハラヒキ

猿女君ハ古事記猿能通々藝命命御天降段命詔イタラ天宇受賣命天宇受賣命此立御此立御
 前所仕奉猿田毘古大神者專所顯申之汝送奉亦其神前所仕奉猿田毘古大神者專所顯申之汝送奉亦其神

八、和邪杵と訓べし、和邪ハ、古事記傳十五丁下の
 和邪ト云、今世も神又死人の靈りとの崇る物
 乃和邪ト云、是れ久かくて何事もゆれ人の口と借る
 神乃詔のせ給ふと和邪歌と云、出、杵ル、同傳十五
 和邪表樹の和邪とト、出、猶杵ハ下十三
 丁、石窟の隠り坐る天照大神と、招、出、猶杵ハ下十三
 九、云、べし、○以、真坂樹為、髮髻華、山陰ふ、乃文次
 第亂まきり、古傳書よ、則以、天香山、之真坂樹為、髮以
 蘿為、手繩、手持、茅纏、之稍、立於天、石窟戸、之前、而火處燒
 覆槽置、顯神明、憑談、巧作、俳優、とや、もぞ有、まむと、例
 注撰者の文と改めらるるも、中中ふれ、の次第
 の亂たり、まむと、件、の事、の皆天、鈿女、命、の形、事、の

多ふ、乃文乃如くまきり、亦以より下別事あり、
 異人注ありとぞと聞ゆ、まむと、何、まむと、坂樹ハ古
 事記より真折とあり、是ハ上ふ五百津真坂樹と有、
 樹形多べし、此、樹と鬘とせ、事心得、らる、乃山陰ハ
 師の是ハ真折なりと、真坂樹と誤りたり、まむとと云、
 たる、實ハ然なりとあり、古事記傳八の五十二丁、ま
 ざり、別ありとあり、まむと、真折ハ冠、考、まむと、
 ハ、古事記より日影、古語拾遺あり、蘿葛者比、加氣と何
 久、此、物、古事記傳八、五十、和名抄、菘、類、ハ、松、蘿、一、名、女
 如、世、古今集、物、名、ハ、色、青、く、帯、の、如、く、は、る、是、ハ、女、蘿、ハ
 松、枝、ハ、生、て、甚、長、く、色、青、く、帯、の、如、く、は、る、物、と、漢、籍、共

ふそそくきバダリガクテハ名も松の上より懸
よ一形り此物奥山形らぎの生む又乾ても色青く
枯と出○爲手繼古事記あり手次繫と有り手繼ハ
和名抄具衣服ハ本朝式云禪禪各一條舉多須岐禪知波
夜今按未詳と有り此物ル古事記傳ハ禪字の袖と
宇形も須支又繼字ハ多須岐ハ當ら代字鏡ハ繼員
兒帶也須支又繼束小兒背帶須支と有り是ハ依て按
小兒と負帶と須支と云と本ハ袖とありて帯とハ
手よりかく多物形も多須岐とい云あると故ハ
手字と添て多須岐ハ此字を用ひらき禪ハ用ひら
て後世も多須岐ハ神事ハ全此段の故事ハ依て禪ハ用ひら
多事形も後ハ羅の多須岐と云事ハ九書ハ
見え代多須岐ハ後ハ羅の多須岐と云事ハ九書ハ
見え代多須岐ハ後ハ羅の多須岐と云事ハ九書ハ
木綿手次と云ハ疑ハ古ハ出今按ハ古ハ出今按ハ古ハ出
云き物と漢籍共ハ見えと云ハ古ハ出今按ハ古ハ出今按ハ古ハ出
の如き物と漢籍共ハ見えと云ハ古ハ出今按ハ古ハ出今按ハ古ハ出

生る物ハ長かりけむ皇國の奥山ハ生る物ハ然
ら松ハ別木ハ五六十寸より長き物ハ
結合せく長くハ手次ハ繫べからん繩ハ如
かみ綿物ハ代ハ便ハ○火處焼ハ比
故ハ木綿ハ代ハ便ハ○火處焼ハ比
乎多積と訓べ今本ハトコと訓ハ字ハ火ハ影
火中火籠り云ハ火ハ用ハ事ハ初ハ
保登古品と云ハ火ハ指ハ今世ハ火ハ焼處
と保登と云ハ火ハ指ハ今世ハ火ハ焼處
何ら火ハ焼處と云ハ言ハ比乎と云ハ處
字と添らきハ其狀とあらせりハ山
蔭ハ焼字ハ次の履槽置の置字漢文ハ上ハ有ハ
きハ下ハ古傳書のハ取ハ
何ハ古事記曰天手刀雄神隱立戸掖而天宇受賣命
手次繫天香山之天之日影而爲髮天之眞折而手草結

天之香山サカ之小竹葉ハヤ而ハと何りて、火處ヒ燒クと云事ハ洩クり、
火と證は、是レハ後、世ハ庭○覆槽ウケケ置セハ、古事記コト子伏フセ汗氣アツケ
而テと何り、覆字フセハ汗氣アツケの形狀カタチと云置キハ伏フセ當ル、此事
同傳ドウデンハ是レハ此物の上ヨリ立テ舞ハ踏テ響ク如ク打ツハ、此音コト乃ハ名義ナギハ空カラ筈ハの如ク、又マタ後ノ世ノ神事カミコトハ太鼓
と遺ヒきり、古事記コトハ、伏フセ汗氣アツケ而シテ踏フ登リ杵キ許コト志シと云事コト如ク、
其字コトハ、此物コトと云置キ事コト何ノ用ヨリと云事コト、
人類聚國史ヒトノミナソノコトハ、于該布西ココロと何り、云ハきと、今彼書數
本ホと見ミる、布西フセの二字フセ何ノ事コト、此二字フセ有リて、置

字餘ヒきり、若然訓ニべし、覆槽置キ此云ハと何り、
置キ字布西フセ當ル、
布西フセと何り、本ホと、古語拾遺コトハ、宇氣ウキ布フ祿ロクと何り、
○顯神明之憑談カミカミノコト、同書ドウショハ、是レハ顯字カミ
乎那須フナと讀ミ添フべし、今按イマ、
奈須フナと云、二字フナ有リ、
此言同傳コトハ、
與他處コト爲シ少異コト也、諸神欲カミ令ル日ヒ神カミ深シ見ミ奇物カミ故コト俳優カミ萬態カミ

ひく宣給ふ御言なり又此下思保志給比互と讀添
○者○乃の捨て○細開ハ保曾米余比良幾と訓べト
保曾米とハ細と云ふ目と云と添て云なり又開ハ
アケテと下五卷御間城入彦五大御歌ハ宇麻佐階
和能等能々阿佐妬珥毛於辭寐羅箇祢和能等能渡
馬廿八卷ハ天命開別天皇の開万葉五丁長歌ハ遠等
咩良何佐那周伊多斗乎意斯比良伎十四丁廿一於久
夜麻能真木乃伊多渡乎等杼登之氏和我比良加武爾
伊利伎氏奈佐祢イリキテナサネなりて戸あり皆比良久と云り
阿氣アキ離リと云るハ物ニ合ニ合古事記あり於是天照大御神

以爲怪細開天石屋戸而何久○窺ハ能曾美坐と訓
べト是ハ同傳ハハ能曾久と本同言なり但物の間
事の状態と伺ハ出○之ハ捨て○手力雄神名義同
傳ハハ此神の名義顯きくハ引開くハ手力の優
たらしむ神と充てき出○則ハ捨て○奉承ハ登利互と
訓べト今本タマハリと云ハ貴神ハ坐故云云ハ
古事記あり取其御手と云ハ然らば古事記曰細開天石
屋戸而内告者因吾隱坐而爲天原自關亦葦原中國
皆聞矣何由以天宇受賣者爲樂亦八百萬神諸咲爾天
宇受賣白言益汝命而貴神坐故歡喜咲樂如此言之間

天兒屋命布刀玉命指出其鏡示奉天照大御神之時天
照大御神愈思奇而稍自戸出而臨坐之時其所隱立之
天手力男神取其御手引出と有り○引而奉出り同書
み引出と有り云々而り捨べし又奉り麻都利と訓べし
此麻都利の辭云々此下一書あり手力雄神侍磐戸側
字の意あり云々此引開之者日神之光滿於六合古事記あり
故天照大御神出坐之時高天原及葦原中國自得照明
あど何事と此あり是と略きしに聞えり○中臣神忌
部神り天兒屋命と太玉命やれば然訓べし
中臣も忌部も共子
氏姓あり其氏姓と指て云々此の神と云々住吉神春
日神あど云例の事と有り此の神と云々又此神等

今世志米奈波と云り是は古事記傳八葉本と云
俱梅の許米の葉尻と斷去りて出万葉十八丁小祝
さあから許米置たり繩ありと云々此の神と云々
部等之齋經社之黄葉毛標繩越而落云物乎と切て斯
と云俱と略○繩亦云左繩是は按み後人注と加へり
然る故に細書此事ハ先哲達も云了事なり
此は是ハ左繩と云事なり髻華山陰も此ハ文亂
き字脱た多有り端出之繩此云斯梨云云亦云左繩と
有り云々此有りとはきども端出之繩の下に注せり
思ひ了き今本のゆゑに置りし有りは上之繩

ハ行の如き形せども然らば、是ハ繩亦と云ふ事なり
又訓注の本字ハ之字と今本脱せり、今加へつ。○乃ハ
捨べし。○請曰云云、勿復ハ、古々與利内余那と訓、還幸
と、加閉利入坐曾と訓べし。古事記ハ、即布刀玉命以
尻久米繩控度其御後方白言從此内不得還入古語拾
遺ハ、云云、遷坐新殿則天兒屋命太玉命以日御綱今
日影之像也、迴懸其殿と何ハ、古事記傳ハ、日影之像
と云ふハ、附會の、是ハ此書の如ク、大神の石窟ハ、
還入坐ぬ爲子控度せし繩あり、然るに後世ハ、神社
の御前方ハ引度せし、如何ハ多事なり、む、通證ハ
龍照近

説子神祠の齋場ハ、斯梅繩と引度せしハ、不淨と上
了形りと云りと出、今按、斯梅繩と引度せしハ、上
ハ、云、如ク大神の石窟ハ、遷入坐ぬ爲ハ、不淨と
隔と云ハ、違つるハ、然きども、後世ハ、斯梅
繩と引度せし處ハ、神社より餘ハ、後世ハ、人知、若ハ
り得て、自ら不淨なり者、得入ぬハ、此説と同ク、若ハ
神の鎮坐了處と、莫出坐そと、この事なり、あや何らむ
○諸神ハ、加美多知と訓べし。訓考五卷九十九、古事記ハ
ハ、於是八百萬神共議而と何リ、此、紀ハ、カ、了、傳、多
リ、○歸罪ハ、都美乎與勢と訓べし。下六卷九十五、卷
十廿一卷、丁、四、ハ、見、ハ、後、世、ハ、罪、ハ、何、ハ、罪
ハ、古事記傳卅、丁、十、ハ、都、ハ、美、の、切、ハ、事、ハ、都、ハ、
ハ、同、ハ、諸、の、凶、事、ハ、云、ハ、又、穢、ハ、禍、ハ、心、ハ、事、ハ、
ハ、自、然、ハ、事、ハ、事、ハ、九、ハ、厭、ハ、心、ハ、事、ハ、

卷丁廿三 不責字と訓り、万葉十六丁廿二、課役徵者と
 有りて、詞と以て迫りたり。○至も捨て、○使拔髮古事
 記あり、切鬚及手足凡令拔而有り、是も切鬚と有り、
 心得む、その鬚
 たり、何計の品あり、若くは神代は切鬚と有り、人交
 り、何れ法則あり、何れ法則あり、又、此、時、此、尊、
 給つる、法則とあり、人交りあり、髪と切て、髪と剃事無り、
 未、卷、人、僧と有り、時、髪、此、切て、髪と剃事無り、
 也、此、遺風あり、下、廿五、卷、古人大兄皇子、廿八
 卷、天、淳、中原、瀧、真人、天皇、あど、見、是、
 り、或、斷、事、事、事、古、事、記、傳、九、不、是、
 上、云、了、二、意、以、説、一、此、被、物、極、
 き、被、尊、の、所、有、了、限、取、て、多、
 素、鬚、鳴、尊、の、所、有、了、限、取、て、多、
 生、た、多、鬚、鬚、凡、牛、取、て、被、の、料、の、物、
 あり、所、有、了、物、も、穢、た、き、
 穢、淺、き、故、少、の、物、と、出、
 極、め、深、き、穢、た、れ、
 所、有、了、物、と、皆、
 棄、て、

も猶清まり終ぎ、故、其、御、身、子、生、
 棄、て、清、む、る、あり、何、れ、
 切、と、有、り、心、付、き、
 人、交、り、あり、ぬ、事、考、
 と云、事、ハ、千、座、の、數、
 あり、○以、ハ、捨、て、○贖、
 と穢と云、あり、又、贖、ハ、
 七、四、十、ハ、時、風、吹、飯、
 一、十、丁、奈、加、等、美、乃、
 伊、能、知、毛、多、我、多、米、
 拂、ヒ、騰、了、能、賀、ハ、
 四、卷、丁、二、圓、大、臣、詞、
 ○日本書紀訓考七卷
 ○三十四

贖罪又廿是鵝為水間君犬所齧死由是水間君恐怖憂
 愁云云獻鴻十候與養為人請以贖罪十七卷十四筑
 紫君葛子恐坐父誅獻糟屋叱倉求贖死罪あど此餘十
 卷二丁四みり見えり又七卷十七丁み身橋織御詞
 了贖ハ別訓あり又廿八卷六丁是らハ被ふありは
 安斗連阿賀布と云人名見也是らハ被ふありは
 きども物と出〜身ノ罪と騰了事ハ同ト○扱其手
 足爪あち上云了古事記ハ及手足爪令扱而と云下
 一書みハ以手爪為吉爪棄物以足爪為凶爪棄物云云
 と有りて千座ハ數ハ加ふるありは〜和名抄類
 爪手足上甲也和名豆女と見也下十六卷五丁扱署預扱人頭

髮使髮使此此と別ありは〜此亦曰ハ古事記の如く上の髮
 と同く一連ありは〜別ふせら〜り○之ハ捨
 て○己而ハ加久志互と訓〜○逐降逐ハ今本遂と
 あり、髻華山蔭ハ遂字ハ誤り逐と何本ハ〜と
 ありと下一書ハ以神逐之理逐之とありは依て今改
 むは〜其處ハ逐之此云夜羅賦此夜と今本と何本ハ
 神夜良比夜良比幾
 と訓〜此言既
 一書曰是後雅日女尊坐于齋
 殿而織神之御服也素茂鳴

尊見之則逆剝班駒投入之殿
 內雅日女尊乃驚而墮機以所
 持拔傷體而神退矣故天照大
 神謂素戔嗚尊曰汝猶有黑心
 不欲與汝相見乃入于天石窟
 而閉著磐戶焉於是天下恒闇
 無復晝夜之殊故會八十萬神
 於天高市而問之時有高皇產
 靈之息思兼神云者有思慮之
 智乃思而白曰宜圖造彼神之

象而奉招禱也故即以石凝姥
 爲治工採天香山之金以作日
 矛又全剝眞名鹿之皮以作天
 羽鞆用此奉造之神象是即紀
 伊國所坐日前神也石凝姥此
 云伊之居梨度咩全剝此云宇
 伎都播

是後とい本書の初めは、
 此の或書と取き、此以前は、
 讀ぶ、如く、
 此以前は、
 無き、
 捨べし、
 ○雅日

の服殿の内不建たり一機具あり○所持ハ毛多麻倍
 流と訓上の以ハ梭より返るゝ余互と訓○神退矣ハ
 上伊弉丹尊と十一如カ書リ、ある天々々の事あり、天
 の神退矣と云事此ハ初見ス、此ハ訓考六卷
 四十五丁ハ云、如ク此國土ハ天降坐一神ハ終
 神退坐ぬまど、そを傳りぬと ○猶○欲與汝三字ハ
 云事是もく思ひ定むと ○捨
 捨べし ○著ハ、うづの山蔭ハ師云著字ハあしと云
 と書キ、古毛利坐幾と訓べし ○天下ハ天之原毛阿
 志原能中都國毛と訓事上ト云久 ○恒闇恒ハ常の
 借字なり、登古夜美と訓べし ○無復晝夜之殊ハ與流
 比流能和幾毛奈志と訓て、復字ハ捨べし、殊ハ別字の
 借字なり

○天高市市ハ、古事記傳四十二丁九ノ方より市ノ四
 丁ノ處と云、出此ハ天安河の邊なり、下二卷十三
 大物主神及事代主神、乃合八十萬神於天高市とあり、
 此ハ訓ハ古事記、朝倉宮、御歌ハ、夜麻登能許能多氣知
 大和の高とあり、從べし ○會ハ、髻華山蔭ハ、八
 市あり、有る會字の置處違つり、師ハ、故の下ハ、高皇產靈
 尊の五字有る、と云き、然レ、此段石窟の前
 行ハ、諸神會ハ、高皇產靈尊の命を受たる、故あり、
 事ハ、上、本書ハ、會合とあり、合字と略キ、終リ、○
 問之ハ、同處ハ、計とあり、訓あり、○有ハ捨、○高皇產
 靈、髻華山蔭ハ、此、下ハ、類聚國史ハ、尊字ハ、終リ、と

何多不依、美許等と讀添べし、○云者二字同書子此
本より捨べし、○思慮之智、於毛比多婆加流佐登
利と訓べし、多婆加利ハ、手謀と云、事なり、その手
爲了事なり、ゆゑも、然云ハ、人の馴る事と手馴と云
は同ト、ゆゑ之り捨下、佐登利ハ通證四の四十七丁
も、取ハ然る事なり、ゆゑも、万葉十二丁ハ、丈夫之聰神毛今
者無と、何る聰と、佐登幾と訓下、略解ハ、ゆゑも、
事なり、其ハ進疾の略ありと何り、此、聰と、玉がせき七
なりと、何るハ、理ハ、ゆゑも、万葉の歌ハ、ゆゑも、
も、去ハ、然る事なり、ゆゑも、真ハ、ゆゑも、
の切の須と、佐通ハ、云ハ、登利ハ、取あり、ゆゑも、人の

意人の爲所行と識と、己が心の進取と云、言あり本
書ハ、深謀遠慮と何り、○彼神之象ハ、天照大神能美
加多乎と訓べし、加多と云、言ハ見えと、下十四卷
九、大御歌ハ、難我加陀播於柯武汝之形ハ万葉一丁六
ハ、丈夫之得物、天手挿立、向射流圓方波見爾清潔之
と何り、是ハ加多知と云、影立の氣と略きたる、又
と云、添ハ、知ハ、ゆゑも、此ハ、知ハ、比古
志都久利と訓べし、宇都志ハ、下卅八ハ、遷置四卷丁六
遷都と見ゆ、あわ顯と云、事ハ、利ハ、自、志と云
と添ハ、志ハ、令の意あり、下廿一卷丁四ハ、作太子

ありあけ又太字女と度咩と違つる事ハ彼抄下次於
賢と云ふ了み太字女ハ老女の称度咩ハ女不預らぬ
事と云ふ此神の子孫ハ鏡作連是なり此事次一書不見
也○治工ハ加奴知と訓べし名義古事記傳八丁四小
金打と約大出古事記ある求鍛人天津麻羅而科伊斯
許理度賣命令作鏡と有り此麻羅ハ下四卷二丁不倭
同人ハ一々ハ時代違不隔と云ハ疑ハ一々ハ別人と
一々ハ同名あり此事古事記傳八丁一神の名ありを
所らぞ銀部の通名みやと有りきども必通名とも聞え
る中みハ同名も有りゆのあさ石疑姥神と治工の
上と一々ハ天津真次の種々の作らせしなり○天香山
之金古事記あり天金山之鐵と有り此の金の借字は

て剛鐵なりと平田氏云り故の名なりと有り○
作日矛以ハ表不當て訓べし此日矛ハ本書ハ天
鈿女命則手持茅纏之稍と何事と作せり古事記
見事抑此矛ハ天鈿女命俳優不専ら用ゐる大神と
招禱一品をれば後中ぐも鏡と瓊を添りて貴物あり
坐落る此事下云べし山陰古史徴三の十三
丁あどみ横井千秋曰日矛字ハ象と誤せりあ傍
と云ふ初度と取せり古語拾遺ハ初度所禱少不食意
造之神象是即紀伊國所坐日前神也何事ハ後度子
て日矛の處初度と云て日象なりハ矛の下ハ是即伊
勢所坐大神也何事ハ初度ハ伊勢鎮坐御鏡ハ全く
洩たあり然るに何のよしぞや聞えぬ事なりと何
て日矛と作せりハ何のよしぞや聞えぬ事なりと何

事と略せしむ、不意、圖造彼神之象云云と有り、故に疑ひせしむ
のあり、かみう、不此、紀ハ文と略せしむと云事ハ、本居
大人常不云き、事ハ、此ハ至て心付せしむ、御誓
り ○眞名鹿之皮、眞ハ稱て云言、名ハ之不通、上段
不天真名井と有り、眞名ハ同ト、古事記ハ、眞男鹿と
有り、○全剝ハ、同傳ハ、丁ハ、全ハ皮と剝時ハ、中ノ空、虚
形ハ、今、俗言ハ、出、古事記ハ、内、抜、天、香山、之、眞男鹿
ノ、肩、抜、而、取、天、香山、之、天、波、々、迦、令、占、合、麻、迦、那、波、而、と
有り、下ノ種々、物と備て、大神ノ出生むとト合せしむ
料ノ鹿形ハ、此ハ、牙、又、鏡と作、料ノ、羽、鞆、子、用、り、物
形ハ、○天、羽、鞆、ハ、私、記、ハ、今、鍛、師、所、用、吹、皮、者、也、謂、之、羽

者、以其、扇、風、似、鳥、翼、也、と云、了、物、あり、是、と、鹿、皮、と、作
ま、り、形、ハ、今、世、ハ、箱、ハ、作、り、其、内、ハ、皮、と、入、置、あり、和
吹、治、火、令、熾、之、囊、也、漢、語、也、
云、鞆、依、布、波、加、波、と、有り、
今、俗、布、以、古、と、云、ハ、
吹、子、と、云、事、あり、
○此、ノ、文、紛、ら、し、其、ハ、日、矛、也、
此、羽、鞆、と、作、せ、し、形、ハ、然、る、ハ、其、と、云、又、其、作
了、具、と、求、調、あり、事、不、審、事、あり、出、ハ、全、剝、眞、名、鹿、之、皮
以、作、天、羽、鞆、以、作、日、矛、と、有り、
ガ、考、み、り、
○之、ハ、捨、て、
○神、象、今、本、象、字、無、ト、上、文、ハ、彼
神、之、象、と、有、れ、バ、此、ハ、決、て、有、る、處、ハ、今、加、し、形
古、事、記、傳、廿、八、ノ、廿、五、丁、子、引、き、
た、り、
○是、即、二、字、捨、て、ト

〇日本書紀卷四十四
 〇四十四
 〇日本書紀訓考七卷
 〇四十四
 〇日本書紀訓考七卷
 〇四十四

一書曰日神尊以天垣田爲御
 田時素戔嗚尊春則填渠毀畔
 又秋穀已成則冒以絡繩且日
 神居織殿時則生剝班駒納其

見ゆ事と以て此よ
 略き一ヤラむ

殿内允此諸事盡是無狀雖然
 日神恩親之意不愠不恨皆以
 平心容焉及至日神當新嘗之
 時素戔嗚尊則於新宮御席之
 下陰自送糞日神不知徑坐席
 上由是日神舉體不平故以恚
 恨迺居于天石窟閉其磐戶于
 時諸神憂之乃使鏡作部遠祖
 天糠戶者造鏡忌部遠祖太玉
 者造幣玉作部遠祖豐玉者造

〇日本書紀訓考七卷

〇四十四

以罪(即)者(戸)以(聚)野(樹)玉(ク)又(使)山(雷)者(採)五(百)箇(真)坂
 有(於)素(茂)鳴(尊)而(責)其(祓)具(是)以(罪)於(素)茂(鳴)尊(而)責(其)祓(具)是
 手(端)吉(棄)物(足)端(凶)棄(物)以(罪)於(素)茂(鳴)尊(而)責(其)祓(具)是
 觸(戸)小(瑕)其(瑕)於(今)猶(存)此(以)罪(於)素(茂)鳴(尊)而(責)其(祓)具(是)
 神(祝)祝(之)於(是)日(神)方(開)磐(以)罪(於)素(茂)鳴(尊)而(責)其(祓)具(是)
 集(時)中(臣)遠(祖)天(兒)屋(命)則(以)罪(於)素(茂)鳴(尊)而(責)其(祓)具(是)
 篤(八)十(玉)籙(野)槌(者)採(五)百(箇)皆(來)以(罪)於(素)茂(鳴)尊(而)責(其)祓(具)是
 野(篤)八(十)玉(籙)野(槌)者(採)五(百)箇(皆)來(以)罪(於)素(茂)鳴(尊)而(責)其(祓)具(是)

亦(以)唾(爲)白(和)幣(以)澆(爲)青(和)
 幣(用)此(解)除(竟)遂(以)神(逐)之(理)
 逐(之)送(糞)此(云)俱(蕪)摩(屢)玉(籙)
 此(云)多(摩)俱(之)後(具)此(云)波(羅)
 閉(都)母(能)手(端)吉(棄)此(云)多(那)
 須(衛)能(余)之(岐)羅(毗)神(祝)祝(之)
 此(云)加(武)保(佐)積(保)佐(賦)
 積(逐)之(此)云(夜)羅(賦)

日神尊ハ 警華山ハ 陰ハ 尊ハ 宇ハ りハ 阿麻呂ハ 良須ハ 大美神
 と訓奉ル 〇ハ 天垣田ハ 爲ル 御田ハ 御田ハ 天之垣津田ハ

余と訓て、爲い捨づ、垣田今本カキタと有り、神名帳、和泉、國、日根郡、加茂
多神、社、和名抄、小、豊前、國、宇佐、郡、垣田、郷、ツと見ゆれど、万葉十三丁、二、入、神、南、備、乃、清
三、田、屋、乃、垣、津、田、乃、と、何、れ、バ、然、訓、づ、一、あ、る、此、歌、の、如
く、御、田、屋、何、る、處、乃、垣、内、の、田、乃、り、○、時、○、則、り、捨、て、○
填、渠、古、事、記、み、埋、其、溝、下、一、書、み、埋、溝、と、何、り、上、本
ハ、略、き、古、語、拾、遺、み、美、曾、宇、女、と、何、る、み、依、づ、一、和、名
抄、河、海、小、釋、名、云、田、間、水、曰、溝、和、名、三、曾、渠、同、上、又、畎、田
中、渠、也、和、名、太、三、曾、あ、ど、何、り、此、事、古、事、記、傳、八、五、小、溝
埋、渠、水、と、引、き、り、出、○、又、り、捨、て、○、穀、已、成、ハ、多、奈、都
物、美、能、流、時、余、と、訓、づ、一、○、冒、以、絡、繩、ハ、今、本、阿、世、奈、波

乎引和多須と訓久か、まが冒ハ纂疏子且子作、
從づ、ト、何、く、阿、世、奈、波、と、云、事、此、より、餘、子、見、え、今、按、
小阿世ハ阿佐とも云、了、乃、多、づ、ト、下、十、七、卷、御、歌、小、吟、
吟、企、阿、藏、播、梨、と、何、る、阿、藏、と、一、あ、り、是、ハ、繩、ハ、搓、組、物、
乃、其、と、指、て、阿、世、と、云、り、意、ハ、思、ひ、得、き、き、と、云、此、
の、絡、繩、と、是、乃、づ、ト、是、ハ、通、證、ハ、田、ハ、繩、と、引、直、て、他、
人、の、田、と、我、田、ハ、引、直、る、あり、と、云、
り、又、遠、江、人、土、滿、ハ、脚、の、替、り、ハ、繩、と、引、直、る、界、と、混、
り、須、史、去、而、見、壯、鹿、神、名、火、乃、淵、者、淺、而、瀬、二、香、成、良、牟、
と、何、る、阿、佐、思、ハ、物、の、變、了、事、と、聞、ゆ、れ、ハ、あ、る、の、絡、繩、
此、阿、世、と、通、み、何、る、と、云、り、と、云、り、と、云、り、○、且、ハ、麻、
多、○、織、殿、ハ、波、多、杼、能、○、則、り、捨、て、○、生、剝、ハ、古、事、記、
○、日本書紀訓考七卷
○、四十六

比宮 文式大被詞不見也祝詞考ふらひ生をがく其皮
と刹と云ありと何そはく此上ふ天之と讀添づー○
殿ハ上の織殿と何る織字を略きしなり○約ハ上
投入と何るふ同訓なり○凡此諸事ハ此餘ハ古事記
訶志比 小便戸上通下通管馬管牛管鶏管犬管又式大
被詞ふ槌放串刺 此ニハ下一 又本書ハ馬と伏了
事あり是らと指て云なり久しき諸ハ母呂母呂と訓ニ
しあらし神も品も幾つも總云詞なり○盡ハ
美奈○是ハ捨て○恩親之意ハ 事記と照し見て古語
と漢文との違ひもあはれど此紀の文を改加都豆
られざる甚しき事どもあり

○不愠ハ登賀米給波受豆と訓づしあらし古事記此段
ふ登賀米受豆と何るふ依万葉四丁ふ吾爲流和謝乎
害目給名十八 世五 比等毛登賀米授あど何り 言意
科と云る登賀より ○不恨二字捨て○皆以ハ奈保○
出言なりしべし 平心容ハ字都久志美給布○及至ハ 至と次の當とい
たづなりし言乃重ク 古々余○當新嘗ハ 大余倍幾古
て煩らなりしとあり 志食と訓づし新嘗上丁ふ出○之ハ捨て○新宮ハ 同
書 此新宮素戔鳴尊の新宮の如く聞え給ら 新嘗聞
ハ其新宮と其字をとらまはしとあり 其宮と新し作らせしやあべし○御席ハ下廿五卷
丁ふ置於御座之前と書きし共ハ美麻志と訓づし

この坐と云言と用言ふ云く上御と云称言と冠ら
せ云了なり。○自の捨て。○送糞の上六出。○日神二
字。○徑も捨て。○坐の爲給布爾と訓。○席より六字煩
るれ捨づうらの山蔭よ此の日神二字。○舉體ハ美
々於能豆加良。○不平ハ今本ヤクサミと訓る下三
よも不平とかく訓れど病坐るふり。○氣我
礼坐幾と訓づ。あち上ふ引る古事記詞志比。○尿戸
と何る穢ハ此や初あるらむ。○恚恨ハ上十五丁。○訓
らまど。美伊加利坐と訓づ上。本書ハ發愠と何る文
體なり。○迺ハ捨て。○居ハ上。本書又一書ハ入と何れ

ハ以利給比と訓べト。○閉ハ佐志給比幾。○其ハ捨て
○之ハ捨て。○鏡作部ハ古事記日子番能通々。○伊
許理度賣命者鏡作連等之祖と何り。はく部とハ群の
切なり米札ハ米と切り。此言古事記傳廿四十五。○登
何組云今世武家み。出此何組御難新と云。ハ鏡作
者引擧了長ある故の称あり。猶上忌部と有。此
氏ハ古語拾遺水垣。更令齋部氏キテ。石凝姥神天目
一箇神齋二氏。更禱鏡造云云。又神祇官神部可有。中
臣齋部猿女鏡作玉作盾作神服部倭文麻績等。氏而今
唯有中臣齋部等二三氏。自餘諸氏不預考選神齋亡散

其葉將絶と有り、古事記傳十五の六十三丁、其世々史
 其甚く衰へた子なり、姓氏録も載され、其昔、
 畿内より此氏絶たり、神の子孫の如く、此片の廿七丁
 靈寶と云ふ、甚く衰へた子なり、神の子孫の如く、此片の廿七丁
 絶けむ、馬連等、祖と有り、異姓なり、輕氏人、下廿九卷、鏡
 馬連等、祖と有り、異姓なり、輕氏人、下廿九卷、鏡
 作、造賜姓、曰、連と見ゆ、古語拾遺の文、みそ、絶と有り、
 みて、如く、續紀より、此方、見え、此氏の名の遺れ
 如く、續紀より、此方、見え、此氏の名の遺れ
 和名抄、大和國城下郡鏡作、久利、都郷、古事記
 和名抄、大和國城下郡鏡作、久利、都郷、古事記
 加の下、美字脱、り美字と略き、云、了、く、式、同郡鏡作、坐、云、
 り美字と略き、云、了、く、式、同郡鏡作、坐、云、
 神社も有り、又和名抄、伊豆國田方郡鏡作、豆、久利、美郷
 神社も有り、又和名抄、伊豆國田方郡鏡作、豆、久利、美郷
 有り、○天糠戸者、次一書、天、天、抜戸神、兒、石凝戸邊、
 有り、○天糠戸者、次一書、天、天、抜戸神、兒、石凝戸邊、

紀三の二丁、天、糠戸神鏡作、連等、祖、
 糠戸神鏡作、連等、祖、
 名抄、見え、爾雅注、云、糠、音、康、和名、如、賀、米、皮、也、
 爾雅注、云、糠、音、康、和名、如、賀、米、皮、也、
 額、額、多、比、古、事、記、傳、七、の、七、十、四、丁、
 額、額、多、比、古、事、記、傳、七、の、七、十、四、丁、
 〇造鏡、是、ハ、上、一、書、上、四、十、丁、
 〇造鏡、是、ハ、上、一、書、上、四、十、丁、
 禱作、一、面、ハ、紀、伊、國、名、草、郡、日、前、神、又、一、面、ハ、伊、勢、大
 禱作、一、面、ハ、紀、伊、國、名、草、郡、日、前、神、又、一、面、ハ、伊、勢、大
 神、坐、太、玉、者、造、幣、上、本、書、ハ、太、玉、命、云、云、下、枝
 神、坐、太、玉、者、造、幣、上、本、書、ハ、太、玉、命、云、云、下、枝
 懸青和幣、白和幣と云、此、ハ、其、造、と、云、事、有、
 懸青和幣、白和幣と云、此、ハ、其、造、と、云、事、有、
 古語拾遺、今、太、玉、命、擧、諸、部、神、造、和、幣、と、有、是
 古語拾遺、今、太、玉、命、擧、諸、部、神、造、和、幣、と、有、是
 あり、諸、氏、の、忌、部、の、造、幣、と、太、玉、命、取、持、と
 あり、諸、氏、の、忌、部、の、造、幣、と、太、玉、命、取、持、と

此の略きりなり、その次、一書、太玉命執持而たり、
此の並坐了神、鏡作りの天、糠戸と云、次、一書
あり、天、兒屋命、興台産靈と父神と舉た多、此、神と
豊玉あり、父神の傳をらぬなりべし。○玉作部の次、一
書あり、玉作、遠祖、二卷、丁、みも玉作、是、今本、タマス
上祖とあり、古事記、命、能、通、々、藝、不、玉、祖、命、者、玉、祖、連
等、祖也と見え、此、玉、祖、の、玉、作、と、い、別、あ、て、玉、作、了
神と舉司了神なり、は、玉、作、ル、玉、作、了、群、の、長、上、と、云
は、其、子、孫、六、玉、垣、宮、段、あり、五十瓊敷命、河、上、部、と、成
給、ひ、が、中、入、り、て、其、命、の、下、不、屬、了、なり、是、の、玉、祖、の
子、孫、なり

又、此の豊玉者の子 ○又十五卷、丁、み、難波、玉作
孫、なり、久、分、が、なり、
部、鯉、魚、女、と、云、人、あり、今、も、難、波、不、玉、造、式、の、大、敷、祭、祝
詞、不、齋、玉、作、等、又、神、名、帳、不、出、雲、國、意、宇、郡、玉、作、湯、神、社
同、國、風、土、記、不、玉、造、川、と、云、も、あり、又、帳、不、近、江、國、伊、香
郡、玉、作、神、社、和、名、抄、不、陸、奥、國、玉、造、大、鴨、都、郡、駿、河、國、駿
河、郡、玉、造、多、萬、都、郷、あ、ど、あり、か、此、不、部、と、云、了、玉、作、せ
了、人、等、の、住、了、故、不、名、と、い、なり、了、り、べし、○豊、玉、者、
豊、の、上、訓、考、二、卷、不、出、玉、の、玉、作、了、事、不、依、て、負、坐、了、り
る、べし、豊、玉、と、云、拵、の、下、二、卷、不、豊、玉、彦、其、女、豊、玉、姫、又
名、同、し、別、は、此、神、の、古、事、記、不、玉、祖、命、と、あり、神、の、亦

名形多べト廿八丁出ハの又次一書小天明玉古語拾遺
小櫛明玉此神ハ式小大和國城下郡鏡作麻氣神社
リト部兼俱說小此社ハ此神也祭了と云ク
○造玉トハ本書小八坂瓊之五百箇御統と云了是也
り是小依テ按小豐玉者ハ玉作了事と得小りト又
ハ玉作部ト何ト者ハ玉作者ハ別トりト其ト率司
長上カミりト古事記宮段玉垣小爾コニ天皇悔恨而惡作玉人等
皆奪其地ト何ト是ト小依ハ長上カミと云事トりトべト竹取物語
倉持御子ハ云云カカト六人ト召取テ云玉ハの
校ト作リ給ル何ト云云カ玉ハ作リ何ト云云カ玉ハの
○山雷者山雷ハ夜麻豆知ト訓トべト豆知ハ上ニ訓考三
卷四丁

小出下三卷丁十小薪名ハ嚴山雷ト何トり○八十五ハ玉ハ籤ハ
十ハ數ハの多キと云玉ハの美称ト云辭籤ハ物ト貫ル物
と凡ト云名ハてト此ハ地ハ小衝立トむト爲ス小根ハの方ト尖トら
せて籤ハの形ト何トたト子故ト久志ト何ト云ハあり古事記白
原宮小痛矢串ハ万葉一丁七小布久思毛ト與美夫君志持ハ
と何トり又玉籤ハ大神宮儀式帳ハ着木綿賢木ハ是名太
玉串ハ又月次祭祝祠ハ大中臣太玉串爾隱侍天云云
何トハ此ハの故事ト小依テ幣ト奉ルと云ハり又是ト万
葉三卅七九丁十三丁十八ハあト竹玉ハ繁爾貫垂トも
何トり是ハ竹トと小く切テ玉ハ替テ籤ハ附ル何トの何トり
何ト古事記傳八ハ廿九丁玉串ハ何ト手向串ハ何ト

仁必波太布礼思古吕之可奈思茂是ら身ふ當ふ石子
當ふと云事なり○小瑕ハ古幾受都氣利と都氣利と
云辭と讀添づ、はく小字ハ多し、袁と云ども、め
ふ處ハ古と訓べし、その古事記遠飛鳥宮段此紀ハ美
夜比登能阿由比能古須受と詠下廿四卷十一ハ古佐
屢と詠ふ、其ハ小鈴小猿と云事なり、又万葉十一
十二丁ハシどハ小雨と何し、和名抄雲雨ハ霹靂細
雨一名小雨也和名古と何し、又同抄麥ハ小麥和名古
とハ何し、但ハ其兒と云ハ大人ハ對ちる名ハ古
ハ古より大ハ對し、見ハ又瑕ハ同抄病類ハ瘕和名岐

須と何し、○存ハ阿利、○即ハ捨下、○伊勢崇祕之大神
也崇ハ、伊都幾奉流と訓て、秘之二字ハ捨下、意ハ漢
古事記ハ、此御鏡ハ本書ハ、以御手細開磐戸窺之と云、
古事記ハ、云云、指出其鏡示奉天照大御神之時トキ上、一書
白宣圖造彼神之と何し、御影洩て圖給つ、故ハ此
後ハ御傍去也、御許ハ置せらる、皇御孫尊御天降
處、下二一書ハ、天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝
之曰、吾兒視此寶鏡當猶視吾、可與同床共殿、以為齋鏡
と云、共ハ降給ひ、より、御代々々、皇御孫尊の同
大殿内ハ齋祭給ひ、と瑞籬宮御宇、天皇御代六年ハ

先是天照大神倭大國魂二神並祭於天皇大殿之内然
畏其神勢共住不安故以天照大神託豐鋤入姬命祭於
倭笠縫邑仍立磯堅城神籬云云其より伊勢小出坐
り、珠城宮御宇天皇廿五年小出是神風伊勢國則常世
之浪重浪歸國也傍國可憐國也欲居是國故隨大神教
其祠立於伊勢國因興齋宮于五十鈴川上と有り御靈
代と申し奉るなり猶紀中出給つる處云べし○科
罪科に於保勢と訓べし是ハ負字の意あり俗云付上
本書あり歸罪と有り是ハ此下科之以千座置戸と
科と云言なり故ふ科罪ハ歸罪と云此ハ此下
と云書きありづ○責其被具具ハ毛能と訓べ

責も波多流と訓事上三十三出○手端吉棄物足端
凶棄物ありの手端ハ古事記神代小建御名方神千引
石攀手末而和名抄類手足小遊仙窟云手子師説云太奈
須惠と有りハ皆手の指と云あり其證ハ下五卷九小
更科調役此謂男之彈調女之手末調也と有りハ女乃
手指ハ爲一物と調ふ奉る云事あり十四卷十四
小將百濟所獻手末才伎又丁廿四吳所獻手本才伎漢織
吳織及衣縫兄媛弟媛等と有りハ衣縫ハ手指あり爲所
行なり故ふ手末と云るなりハく足端ハ手端の訓
注ハ依テ阿奈須衛と訓べしハ足之末と云之也奈

嫌ふ詞あり、棄ると云事なり續紀廿六、穢奴等乎伎良
 比賜弃賜布爾依互廿五、先爾捨岐良比賜天之道祖
 我兄塩燒乎皇位仁方定止云天廿六、法乃末爾末爾
 罪奈比賜岐良比給止勅御命乎三十、退給比捨給比
 岐良比賜牟物曾と、何岐良比ハ皆捨了事なり、故
 此ハ棄字と然訓了なりこの本書乃中の亦曰ハ拔
 手足之凡贖之と云古事記ハ手足凡令拔而と何
 と同く手足の凡と拔と岐良比とい云了なり、極々重
 くやき、あつの上み引了同傳九丁六ハ此破ハ極々重
 き破り了故ハ其所有了物ハ穢たれば拂ひ捨了意ハ

海云云是ハ犯重く、極々深き穢あきハ、所有了
 物と皆つら捨て、猶清より終了故ハ其御身ハ生
 たる物中ハ、拂ひ棄て清むるあり、是ハ棄了物ハ
 皆穢垢なり、故ハ、岐羅比物と云棄物と書す、此
 意あり、後世ハ人形作、流ハ穢た、身體ハハ、
 故ハ棄て清きハ代了意ありと何、○以唾爲白和幣
 以、渙爲青和幣唾ハ上訓考五卷ハ出、此物白き色
 故ハ、白和幣と云、又渙ハ、今本ヨダリと訓了
 云、津願、與多利小兒多、涎唾、流、出、於、願、下、也、と、何、ハ、和
 今世ハ、口、中、より、出、る、物、ハ、久、此、ハ、是、と、異、ハ、和
 名抄病類塞鼻、下ハ、渙、久、不、通、遂、至、塞、塞、と、何、ハ、渙、ハ、

鼻より出た物あり釋紀曰私記曰問案玉篇自鼻曰涕然則涕者非自口出之名也何譌與
 大利哉當讀波奈多利答案古本云與大利然則此所用者自口所出之液也私記曰波奈多利と訓べし
 取つ物り唾より上より出た波奈志流と訓べし私記曰波奈多利と訓べし
 讀つと云字鏡の垂る事なり又下七卷五丁は鼻奈多利の鼻流の垂る事なり私記曰波奈多利と訓べし
 垂ると云人此物青き色あれば青和幣といはれり私記曰波奈多利と訓べし
 名あり此物青き色あれば青和幣といはれり私記曰波奈多利と訓べし
 けし二乃以い袁と訓べし私記曰波奈多利と訓べし
 保食神乃迴首饗國則自口出飯云云と何る類なり私記曰波奈多利と訓べし
 抑此物と如此化給へし私記曰波奈多利と訓べし
 記あり上本書あり千座置戸と何る千乃數不足と私記曰波奈多利と訓べし
 きば此物とも其料あり給あり私記曰波奈多利と訓べし
 ○解除竟竟ハ袁私記曰波奈多利と訓べし

閑奴と訓べしある手足爪唾涕あり私記曰波奈多利と訓べし
 出し漸お債て御身乃罪と被竟給へし私記曰波奈多利と訓べし
 加久志氏○神逐之理私記曰波奈多利と訓べし
 古言ハ神やらひ私記曰波奈多利と訓べし
 夜羅賦と訓注あり私記曰波奈多利と訓べし
 漢文より音よ讀むく書せし私記曰波奈多利と訓べし
 ○訓注乃波ハ夜此誤あり私記曰波奈多利と訓べし
 不意思ハ混て書せし私記曰波奈多利と訓べし
 後人の寫誤せし私記曰波奈多利と訓べし
 今ハ改め書け私記曰波奈多利と訓べし

一書曰是後日神之田有三處
 馬號曰天安田雖經霖旱無所損
 田此皆良田雖之田亦有三處
 傷其素茂鳴尊之田亦有三口
 號曰天穢田雨川依之早則焦
 田皆天穢地鳴尊則流之早則
 之故素茂鳴尊則流之早則
 廢渠槽及埋溝毀畔亦重播種
 子秋則插籴伏馬凡此惡事曾
 無息時雖然日神不愠恒以平

怒相容焉云云至於日神閑居
 于天石窟也諸神遣中臣連遠
 祖興台產靈兒天屋命掘天香山
 祈焉於是天兒屋命掘天香山
 之真坂木而上枝懸以鏡作遠
 祖天坂木而石凝戶邊所伊井
 咫鏡中枝懸以玉所作遠祖之
 諾尊兒天明玉所國忌部遠祖
 曲玉下枝懸以粟國忌部遠祖
 天日驚所作木綿乃使忌部遠祖首

○日本書紀訓考七卷

○五十九

遠祖太玉命執取而廣厚稱辭
 祈啓矣于時日神聞之曰頃者
 人雖多請未若此言之麗美
 者也乃細開磐戶而窺之是時
 天手力雄神侍磐戶側則引開
 之者日神之光明於六合故諸
 神大喜即科素戔鳴尊千座置
 戸之解除以手爪爲吉爪棄物
 以足爪爲凶爪棄物乃使天兒
 屋命掌其解除之太諄辭而宣

之馬世人慎收己爪者此其緣
 也既而諸神嘖素戔鳴尊曰汝
 所行甚不賴故不可住於天上
 亦不可居於葦原中國宜急適
 於底根之國乃
 共逐降居

是後乃二字捨了事上三丁云云○天安田安ハ古事
 記遠飛鳥木梨之輕太子御歌ハ夜須久波陀布禮此紀
 十三卷と詠給ゆハ夜須久ハ下十四卷丁廿九ハ普天之
 下永保安樂と何る如く安々と成田と云事ハ和名

も何り又古事記朝倉下六卷も也佐加美とも何
 るの同言なり美の辞る物乃衰オモラと云言なり言意
 の思ひ得ぬ此小田地次第タトコロツギ不惡敷なりと稻乃實入ぬ
 と云下廿七卷丁ニ此州柔者遠隔田畝土地ツツク確非農
ラストコロナリ桑之地也と何るも此と同日州柔の地名あり○雨則流
 之ハ川依田と云なりけり則と之ハ捨了事次乃早乃
 處も同日○焦ハ也氣々利と訓べしハ口銳田と云
 なり雨と旱乃事と云不操○姉ハ奈祢能尊ナネノミコトと訓事既
田乃事ハ略せ小云久○妬害ハ於毛保志豆オモホシテと訓べしハあぢ大神乃御
 田と妨むと思ありるなり○則ハ捨べし○廢渠槽ハカツヒハ訓

注何り比ハ樋波加知訓注ハ比波加知都と何るハ言乃
 久ハ放ちなりその万葉廿三丁不美知乃倍乃宇萬良
 能宇礼爾波保麻米乃可良麻流伎美乎波加礼加由加
 牟と何る波加礼ハ君と放ち往むなり又丁九阿加胡
 麻乎夜麻奴爾波賀志と何るハ赤駒と山ハ放ちなり
 是れ心得べし式大祓詞ハ樋放と書り此事同書
 後釋常ハ板以て鑿て水と置て其水と田ハ引
用うべき時ハ放ち洩し田ハ水と溢ら
且用りし時乃畜と出○及ハ捨て○埋溝ハ上四十
失ハしむるありと○重播之種丁ニ出○則ハ捨て○挿籤此挿今
 本挿誤了釋紀又纂疏ハ依て改む挿ハハ訓注式

大祓詞シササふる串刺シササ古語拾遺古語刺串志佐志とありあり
 己尊の織田シササ乃如く木と田の中シササ刺給ふ祝詞考なり
と刺て田シササ下立シササなり ○伏馬シササの上シササ本書シササ放天班駒使シササ
伏田中シササとありを略シササなりシササ此シササの次文シササへ續く故
 小伏シササの布勢シササ豆シササと訓シササべし ○凡シササ此シササ惡事シササハシササ上一書シササ凡シササ此
何と同一シササ文法シササありれどもシササ凡シササ此シササとシササ惡事シササよりシササ凡シササへ返り
云辞上シササよりの連シササき調シササをシササ今シササなり
て母呂シササ々々と訓シササてシササ此シササの捨シササべしシササありシササ古語シササの格シササありシササ古
 事記シササ浮橋シササ小天神シササ諸シササ又シササ戸段シササ八百萬シササ神諸シササ咲シササ又シササ命シササ後等シササ
 御子等シササ諸シササ下シササ到シササ而シササ續シササ紀シササ廿シササ六シササ小シササ天下シササ人民シササ諸シササ乎シササ懲シササ賜シササ云シササ云
 ありシササ何シササるシササ例シササなり ○曾シササの捨シササて ○無シササ息シササの夜シササ麻シササ謝シササ利シササ幾シササと

訓 ○時シササの捨シササて ○不シササ愠シササハシササ登シササ賀シササ米シササ給シササ波シササ受シササ互シササと訓シササ事シササ上シササ十
 七シササ小シササ出シササ ○恒シササ以シササ平シササ怒シササ相シササ容シササハシササ猶シササ宇シササ都シササ久シササ志シササ美シササ給シササ幾シササと訓シササ事シササ
也上シササ七シササ丁シササ小シササ出シササの上シササハシササ恒シササハシササ皆シササ怒シササハシササ心シササとシササ何シササ久シササ今シササ按シササ小シササ此
ハシササ聞シササえシササハシササ又シササ上シササ小シササの相シササ字シササとシササ略シササ云シササ云シササハシササ紀シササ中シササ小シササ多シササるシササハ
見シササえシササハシササあシササるシササ文シササの連シササくシササべしとシササ餘シササの文シササハシササ見シササえシササるシササとシササ以
て略シササかシササき一シササ處シササ小シササ此シササ字シササ共シササ何シササりシササ此シササハシササ此シササ下シササ文シササハシササ上シササ本シササ書シササ一
書シササ小シササ何シササるシササとシササ以シササて其シササ處シササへシササ讓シササらシササきシササ一シササ字シササ共シササありシササ志シササ加シササ々シササ々
と訓シササべし志シササ加シササ利シササ志シササ加シササ利シササとシササ略シササはシササくシササ此シササの云シササ云シササハシササ次シササの石
窟シササ也乃シササ下シササ小シササ在シササハシササ混シササてシササ此シササハシササ出シササるシササ形シササるシササべし又シササハ
此シササハ次シササ乃シササ石シササ窟シササ也シササ乃シササ下シササ小シササ在シササハシササ煩シササらシササるシササハシササき故シササ小

命と分て書し、此紀に依りたる事ども然らば此
紀の如く、最初に注無ての聞え、事不明、紀
形、書、此紀に偽書あり取不足ざれども、是ら古傳
に依りて記せしむる、但し姓氏録藤原朝臣段津
速魂命、三世孫、天兒屋命、此、餘みりと何多、舊事紀の
市千魂尊と除てり、何き正しうらむと云、中同
書に載りし處、かほる事なり、○而に捨て、○
使所、泥疑申佐志年、○掘、今本握し誤き、本書に
書、其餘の古掘とあり、今改む、○懸乃下の以り
三處、天抜戸の上○天抜戸の上、九丁出此、下
神と讀添、事次乃二神も同ト、○石凝戸邊、石と今本

己に誤、是、誤き、上、一書、石凝焼と何
多と同神、今改む○天明玉、上御誓、羽明玉
と云、神何り、天明玉の阿加流多麻と訓事、其處云つ
は、此神の上、一書、玉作部、遠祖豊玉者、何ると一
神あり、その古語拾遺、櫛明玉と何と、舊事記
乃此、櫛明玉神と見え、下二卷、十四、みも櫛明玉神
と何き、又舊事紀、饒速日神の御供の三十二人
の中、天明玉命、玉作、連等之祖と何き、豊とも天と
も櫛とも云り、と見え、又此神、下二卷、十、玉祖命
と同神なり、と、古事記傳八、廿八、み云き、その

姓氏錄右京、玉作、連、高魂命、孫、天明玉命之後也、云云
故號玉祖連、亦號玉作、連、とあり、是然、と云、さへ同
録、み、高魂命乃孫とあり、此と祖神オヤカミ違タガヒあり、あり
伊弉諾尊乃御子とも、高魂命乃御子とも云傳、と、此
紀、み、伊弉諾尊とあり、方と取、き、さき、ごと、も、姓氏錄と
正、と、と、と、其、此、み、見、え、と、天、兒、屋、命、太、玉、命、の
共、み、高、魂、命、乃、御、子、と、同、録、み、あり、き、は、天、鈿、女、命、石、凝、姥、命、二、柱、の、祖、神、之、
命、乃、御、子、あり、と、是、も、高、魂、此、神、も、一、列、み、其、神、の、御、子、なり、
事、あり、は、は、く、上、よ、引、る、同、録、み、玉、作、連、高、魂、命、孫、天、明
玉、命、之、後、也、天津彦火瓊々杵尊降幸于葦原中國時與

五氏神部陪從皇孫降來是時造作玉璧以為神幣故號
玉祖連亦號玉作連とあり○粟國ハ阿波國なり和名
抄ハ阿波國阿波郡あり國名ハ是より出たりなりと
一、名、義、古、事、記、傳、五、丁、子、古、み、の、粟、と、殊、み、多、く、作、り、
國、あり、故、の、名、出、○忌部遠祖イムベイトホトオヤ古、み、の、忌、部、乃、中、あり、天、日
鷲、神、の、子、孫、粟、國、に、住、居、故、に、如、此、云、り、○天、日、鷲
此、下、に、神、と、讀、添、べ、は、く、姓、氏、錄、左、京、み、多、米、連、多、米
宿禰同祖神魂命五世孫天日和志命之後也成務天皇
御世仕奉炊職賜多米連又右京多米宿禰神魂命五世
孫天日鷲命之後也成務天皇御代表仕大炊寮御飯香

美特賜嘉名又世孫意保止命之後也阿居太都田邊宿祢神
魂命五世孫天日鷲命之後也右京天語連縣犬養宿
祢同祖神魂命七世孫天日鷲命之後也是
の違阿今按左京神別縣犬養宿祢神魂命八世
孫阿居太都命之後也阿居八世と一木六世と
五世みく上阿居太都命の父神と天日鷲神とまきバ即
太都命天日鷲神乃同書太玉命と高魂命孫と
子と聞ゆ多り
此神の神魂命孫と別て記せれども高魂命と神魂
命の一神乃如きの古事記傳三十五云れたきバ祖
神の一神と云べし然る此神の太玉命の下屬

太玉命の令オホセと受了神と見ゆ多り古語拾遺太
玉命ウレヒキ所學神名曰天日鷲命阿波國忌と何り次令
天日鷲神タケキヲ穀木種殖之以白和幣是木綿也己以二と何
り此文今本令天日鷲神の下造木綿津作見神と云
津作見神の作きる物有一が其神名と見混て令天日
鷲神の下誤て入き津作見神此下の字共行と見
て削き多りすべしその白和幣の下是木綿也と記
せるふ其上造木綿との云べく何ら本居大人
も此の行文見らさたり古事記傳十五の卅八
丁不引きも造木綿の二字無し然きども津作見
神乃此混濁入し事を考らせる本有し故み津作見
上以字を補らき久あらず本有しも何るべし
りせどはらば天日鷲神津作見神と二神みて穀木を
殖と思つども此拾遺の此段ハ皆一神みてあせしま
此物の一神みて造るべきと思ふ也此造木綿
の三字ハ細注の是木綿と見混たるのり又古事

十六小此十卷九小近日也然訓り万葉三十六小、人言
 之繁比日玉有者又卅九丁比者、四十一廿二小
 比來十四廿七小、安乎祿呂爾多奈婢久君母能伊佐欲
 比爾物能乎曾於毛布等思乃許能己呂あど何り源氏
 若紫卷小事よろゝ給ひくむむ意の上小近日と書
 了字の如く古呂ハ日數と云古能も近き日數と指す
 云るあり○人の事記蒼生と阿烏比等及佐と注、古
 小阿軒娜磨廼比評利播阿利登比鄧播伊珮耐と詠せ
 らき出雲風土記古志郷云云伊辨那弥命之時以日
 淵河築造池爾時古志國人云云をど何り神の本
 人々崇て云事るれハ字乃如く訓べきが如く何事
 加美多知と訓べしそち此段皆神等乃何はき事

又上二小神人とも為人とも何る小よる○雖多請多
 小佐波と訓べし既小出万葉五一長歌小今世能人
 母許等期等目前爾見在知在人佐播爾何り、何れ此
 の文と考ふる小天兒屋命の以前小神等石窟小對て出
 坐む事と白せし小依て如此ハ詔給つるありべし○
 若此若ハ如と云意ハ加久○言之麗美者言ハ詞あり
 麗美ハ宇流波志幾と今本訓り此言上訓考四小出こ
 天兒屋命此申さ詞餘神等乃申せりより麗美ハシかり
 一と感給つるなり古事記傳ハの四丁八丁小世々乃
 誠歎ありし事との云て辭乃事と等闕るハ心は
 古言と尋むるのとも思ひたらしめ道の意ハ

けり云云 國語の靈の助 了ら言と 辭に感給ふよ 思ひ合され 靈乃 貴
國語の靈の助 了ら言と 辭に感給ふよ 思ひ合され 靈乃 貴
りり ○乃の捨て、侍の佐毛良布と訓べし、此言古事
記傳十四 三四 小 佐の眞の意 毛良布の守 延考へ言
云と 出、此の大神の出坐むやと伺ひ居と云言なり、○
則の捨て、○引開之者、天照大神の少一開きたり、
戸と天手力雄神皆引開給ひたり、○滿於六合の
阿米都知介照渡利幾と訓べし、上 此大神生ふ此子光
華明彩照徹於六合之内と有り、○大喜の伊多久與呂
古毘幾と訓べし、古事記 此神生ふ伊邪那岐命大歡喜
と有り、○即ち、本書も然後上、一書も己而ある有り文

と同ト曾能々知 ○解除の波良間と訓べし、○吉爪棄
物の上、一書も吉棄物と有り、此も爪字を添らき、
手、爪と有り、小依て有り、足爪棄物も同ト、○乃、○
掌の捨て、○太諄辭、太の今本大も作す、訓注も太字
り、此も太字有り、大の中の、後小脱せし有り
づ、大と布登と今太も改め、はる布登と訓べし、是
の稱辭、太玉命の太の如し、諄辭の古事記傳八
五、宣説言なり、云云、能利斗と 出、此も辭字
下、常不云、言と略なり、と 出、此も辭字
と添らき、万葉十七、敷刀能理等其等と詠式、大祓詞
も、天津祝詞乃太祝詞事、事の借字も 又鎮火祭祝詞も
○日本書紀訓考七卷 ○七十三

も然りきび訓注乃能理斗の下、其等の二字脱たる
もやと思つても、月次祭祝詞あり天津祝詞乃太祝詞
と有りて、事字無し、但し是の事字乃脱た、又式八卷の
初に祝詞と云ふ、訓注の無きとも、古より能理斗との
云て、上引る月次祭は、天津能理斗其登との云、此
も命のゆゑ、あつ訓づき有り、大祓後釋ふ以上、代り、
其とつゞり置て定めたる有り、有づから、たゞ其時よ
臨て、其事の趣を、其を申す人の、いづあめ、空
き趣ふ、こを申すつらぬ、と有り言の如く、此も天照大
神を招禱申せる詞に、其時乃獻物と云、又素戔嗚尊

御身を祓き、あめ、彼時との別あり、千座の置物と
言、云、天神の受容給ふと云、有り、是と例
と、罪穢、何者、解除、其時々の獻物と中臣
氏、宣、む、と諄辭と云、然、宣、神、申、と
然、上、乃、天照、大神、を、招、禱、申、す、時、の、能、理、斗、と、
然、後、乃、此、時、讀、申、詞、より、然、云、天、神、の、
獻、物、を、申、す、素、戔、嗚、尊、の、其、罪、の、次、第、と、云、聞、
と、主、と、乃、能、理、斗、と、云、名、も、始、き、る、あ、む、神
名、帳、に、左、京、二、條、太、詔、戸、命、神、社、大、和、國、添、上、郡、太、祝、詞、
神、社、對、馬、國、上、縣、郡、能、理、斗、神、社、下、縣、郡、太、祝、詞、神、社、を
と、見、ゆ、○、使、宣、使、り、志、米、幾、而、○、之、り、捨、て、○、世、人、云、
此、中、の、者、此、二、字、り、捨、て、慎、收、り、加、志、古、米、流、と、訓、づ

于時霖也素茂鳴尊結東青草
 以爲笠簔而行濁惡而於衆神
 曰汝是躬躬遂同距之逐謫者
 如何乞宿於我遂休而辛苦降
 風雨雖甚不我得留著笠簔以
 矣自爾以來世諱負束草以入
 他人屋內又犯此者必債解除
 人之家內有犯此者必債解除
 太古之神逐我今當永去如何
 曰諸神逐我今當永去如何

不與我姊相見而檀自徑去歟
 迺復扇天扇國上詣于天神也日
 鈿女見之而告言於日神也日
 神曰吾弟所以上來非復好意
 必欲奪我之國者歟吾雖婦女
 何當避乎乃躬裝武備云於
 是素茂鳴尊誓之曰吾若懷不
 善而復上來者吾今齧玉生兒
 必當爲女矣如此則可降如
 於葦原中國如有一清心者必當

○日本書紀訓考七卷

○七十六

末と有り、ハク爲ハ、奈志と訓べし、ハク草と笠と蓑ハク小
作と云、ハク下三卷ハク九、ハク推根津彦著弊衣服及蓑笠ハク和
物語、僧正遍照の事と云、ハク處ハ、此少將ハ法師あり、
て、ハク策一、ハク打著て、世間世界と行ハ、ハク有りきと云、ハク夜一、ハク夜
泣、ハク血乃、ハク涙み、ハク有む、ハク有む、ハク又、ハク小野、ハク小町、ハク云、ハク人、ハクと、ハクや、
て、ハク見、ハクせ、ハクり、ハク法、ハク師、ハクの、ハク者、ハクと、ハク何、ハクり、ハク○、ハク乞、ハク宿、ハクハ、ハク衆、ハク神、ハクより、ハク返、ハクり、
著、ハクた、ハクる、ハク法、ハク師、ハクの、ハク者、ハクと、ハク何、ハクり、ハク○、ハク乞、ハク宿、ハクハ、ハク衆、ハク神、ハクより、ハク返、ハクり、
訓、○、ハク是、ハク躬、ハク二、ハク字、ハク捨、ハクて、ハク○、ハク行、ハク濁、ハク惡、ハク而、ハク幾、ハク多、ハク奈、ハク幾、ハク美、ハク心、ハク母、ハク知、ハク互、
○、ハク見、ハク逐、ハク適、ハク者、ハク此、ハクの、ハク者、ハクハ、ハク訓、ハク上、ハクみ、ハク者、ハクと、ハク加、ハク美、ハクと、ハク奈、ハク利、ハクハ、ハク當、ハク不、ハク夜、
良、ハク波、ハク流、ハク々、ハク神、ハク奈、ハク利、ハクと、ハク訓、ハクべ、ハクし、ハク○、ハク乞、ハク宿、ハク於、ハク我、ハクハ、ハク古、ハク布、ハク登、ハク毛、ハク宿、
加、ハク佐、ハク自、ハクと、ハク訓、ハクべ、ハクし、ハク於、ハク我、ハクと、ハク是、ハクハ、ハク漢、ハク文、ハクハ、ハク加、ハク佐、ハク自、ハクと、ハク訓、ハクる、ハクハ、
義、ハク訓、ハク乃、ハク久、ハク万、ハク葉、ハク二、ハク十六、ハクハ、ハク遊、ハク士、ハク跡、ハク吾、ハク者、ハク聞、ハク流、ハク乎、ハク屋、ハク戸、ハク不、ハク借、

云云、其答歌ハ、遊士爾吾者有家里屋戸不借云云、續後
撰中秋、天原宿めそ人もや多れば、秋々雁の音と
ハ、鳴らむ、○、遂ハ捨て、○、同距之ハ、美奈麻袁須と訓べ
し、ハク距、ハクハ、ハク布、ハク勢、ハク具、ハクと、ハク訓、ハク字、ハク乃、ハク久、ハクハ、ハク麻、ハク袁、ハク須、ハクと、ハク云、ハクハ、ハク上、ハク○、ハク風、
雨、ハク雖、ハク甚、ハク風、ハク雨、ハクハ、ハク漢、ハク文、ハクハ、ハク阿、ハク米、ハク加、ハク是、ハク雖、ハク甚、ハクハ、ハク阿、ハク良、ハク氣、ハク礼、ハク杼、ハクと、ハク訓、
べ、ハクし、ハク○、ハク休、ハクハ、ハク夜、ハク須、ハク卒、ハクと、ハク訓、ハクと、ハクの、ハク事、ハク乃、ハク久、ハクハ、ハク捨、ハクて、ハク○、ハク辛、ハク苦、
ハ、ハク多、ハク志、ハク奈、ハク美、ハク都、ハク々、ハクと、ハク訓、ハクべ、ハクし、ハク多、ハク志、ハク奈、ハク美、ハクハ、ハク古、ハク事、ハク記、ハク傳、ハク廿、ハク三、
ハ、ハク十、ハク八、ハクハ、ハク竊、ハクハ、ハク困、ハク出、ハク降、ハク矣、ハクハ、ハク天、ハクより、ハク此、ハク國、ハク土、ハクハ、ハク降、ハク了、ハク坐、ハクる、
ハ、ハク○、ハク自、ハク爾、ハクハ、ハク古、ハク礼、ハク與、ハク利、ハク○、ハク以、ハク來、ハクハ、ハク捨、ハクて、ハク○、ハク世、ハクハ、ハク與、ハク能、ハク人、ハクと、
訓、ハクべ、ハクし、ハク万、ハク葉、ハク十、ハク九、ハクハ、ハク毎、ハク年、ハク梅、ハク者、ハク開、ハク友、ハク空、ハク蟬、ハク之、ハク世、ハク人、ハク君、ハク羊、ハク蹄、

春無有來○著ハルの笠カサも又著トクとも云ありとト簔サと著あり、
○以ヨの捨スて○入イ他人屋イ内ノ此コ中ノ他タも内ノも捨スて屋ヤの
伊イ倍ヘと訓トべし抑ヨ人ニと云フあり他人ニと書キを理ツのめり
る然シきども漢文カンふらそ他人ニと書キ又音コめを讀クもされ
きふあり阿ア太タ志シ比ヒ登トとも訓トあきむ皇國クニ言ハふらた
だ人ニ字ジめを事コト足ル此コ故コトふ他タ字ジの捨スり漢學カンガク者ノ
の云フ又伊イ倍ヘの古事コト記キ傳デン四シ十ジュウ一イチ丁テイ十四ジュウシヨウふ家ケの構カマと總ソウ
の其シ中チウに建ケンた出デ万葉マンヤク二ニ丁テイ四十ジュウシヨウふ家ケ來キ而シテ吾屋ウヤ乎ヤ見ミ者ノと
了リ舍屋セヤありと出デ万葉マンヤク二ニ丁テイ四十ジュウシヨウふ家ケ來キ而シテ吾屋ウヤ乎ヤ見ミ者ノと
あり是コト家ケと屋ヤと別ワケはく内ノ字ジを捨スる家ケ入ルと云フハ
内ノも籠コウて何ナニきババなり其家ケ内ノに居ルて云フ時トキハ同ドウ十二ジュウニ丁テイ卅サウ三サン

ふ久堅ヒサカミ乃ノ雨零アメス日乎ヒト我門ワカド爾ニ簔笠サカサ不蒙テ而シテ來得キ人ヒト哉誰ヤ誰シ○
諱ヒの捨スて○束スの上の結ムスと同事ドウジあれば由ユ閑流カンリウと訓トべ
し○以ヨ入イ他人家イ内ノ此コの以ヨ他タと内ノも捨ス事コト上ノも同
ト、けく入イ乃ノ下シ古コ登ト乎ヤと讀ク添ソ○諱ヒの上の著シ字ジ乃ノ上
其處コトへ以ヨ美ミ幾キと訓トべし是コトの忌イミ字ジと同ドウ本ホの神カミも仕
奉ウケふの云フ餘ヨリ乃ノ事コトも云フはれバ神カミ事コトも穢ケガレを信シ
ざると忌イミと云フが轉マて人ヒト乃ノ信シぎると云フ事コトもありぬき
ふあり○有犯ユウハンの上ノ麻マ多タと讀ク添ソ犯ハンハ都美ツミと訓トべし
犯ハンも罪ツミあるれバ借カ式シキ大祓オホハラヘ詞コトハ過犯アヤマチカレケム家ケ牟ム雜サカ々々罪ツミ事コト波ハ是
れ罪ツミなり○此コトの捨スて○債ツカの勢セ米メとも波ハ多タ流リウ於オ保ホ
とあるべし○此コトの捨スて○債ツカの勢セ米メとも波ハ多タ流リウ於オ保ホ

須と訓と上、本書、科之以千座置戸上、一書よ、科
罪而あどの科と同ト、○此の捨て、○太古之遺法也、
字の語意と違つり、古能登幾與利初礼利と訓べ、
故、此文の如く、祓の伊弉諾尊、初りけきと、其の穢せ
祓給ひ、事罪と祓、此、素戔嗚尊、初りけきと、
神、衣笠著て内へ入事、○是後ハ古々、余、○逐我、我今
當永去、是、小字の、讀てハ、漢籍、あ、上御誓段本
書、此尊の御言、吾、今奉教、將就根國、と何ると照
合せて、我乃下此、我今ハ、登保久、當永去、根國、當逐
へ返りて、也、良閑流乎と訓べ、○與、○擅自、○迺、捨

て、○扇天扇國、天ハ海國ハ山、當て訓て、下乃扇ハ捨
べ、は、扇ハ、登與毛志と訓る、上御誓段、本書
ハ、溟渤以之鼓盪山岳為之鳴响と何る、同ト、は、扇
の上、此、○復と、此、下へ廻、訓べ、初、天より
降、坐、又天へ上り坐、故、此、言無、聞えざ
る、上詣、麻為能煩利給布と訓る、上段、昇
天、之時、又一書、然、何、又一書、及、其上至と
何、○天鈿女、の下、美古登と讀添、は、此、命ハ
女神、常住、天照大神の御前、侍、有、
ハ、○言ハ捨て、○日神の上、加礼と讀添、○弟ハ奈勢

能尊ノミコト○上來ハ麻マ爲キ幾キ坐マ流ル○非復好意ハ麻マ多タ宇ウ流ル波ハ
志シ幾キ御心ミココロ奈良ナラ自ジと訓トべし、ある上御誓段上御誓段本書ハ吾弟オモト
之ノ來キ宣メ以テ善意ハ乎コトと何ナ○我ア之ガ國クニ之ノ賀ガの意イ用ヨぬ
られしなり此事コト首ウタ卷マキ○者モノ歎ナひ、於オ毛モ保須ホス余ニ古コ曾ソ阿ア礼レ
と訓トべし、是レも上段上ふ、當有オモホス奪國ウバヒ之志シ歎ナと何ナ○雖婦オシモ
女メ婦メハ捨スべし、万葉万葉三三四四十十ふ、石戸イハト破ワ手テ力チカラ毛モ欲ガ手テ弱ヨワ寸チ
女メ有アリ者モノ云ク云ク○何ナハ、伊イ加カ泥デと訓トべし、こゝ願ネガ意イあり○
當避トク乎コトハ、麻氣マキ自ジと訓トべし、下シタふ登詔トウシ給タマ比ヒ互ニと讀ヨ添ソ○タ幾キ
武備ブイ幾キハ、上御誓段上御誓段一書一書ふ、設マシテ丈夫オトコ武備ブイと何ナ設マシ同
ト、麻氣マキ互ニと訓トべし、○云ク云クハ、上同段上同段本書ハ一書一書と考カ了ス

ふ字フと多く略シきりなり○之ノ○若シも捨スて、○懷イ不善サ而シテ
ハ、幾キ多タ奈ナ積シ善シ心ココロ毛モ知チ互ニ○復フハ、上ノ扇アビ天ノ上ノは何ナ
て麻多マタと訓ト捨スて、○上來者上來者ハ、麻マ爲キ幾キ志シ登ト於オ毛モ保ホ佐サ
婆バ○今イマ○必カナラも捨スて、○當トク爲キ女メハ、曾ソ礼レ女メ奈良ナラ婆バと訓トべ
し、曾ソ礼レハ古事記古事記神代神代ふ、其綿津見ミヅミ神カミ之ノ宮ミヤ者モノ也ナリ、下七下七卷
六六ふ曰イハレ速津媛ハヤヒメ爲キ一一所所之ノ長チカ其聞ミコト天皇車駕イマノミヤト又マタ討ウチ土蜘蛛ツチクズ
若シ其畏オソ我ガ兵勢ヒノセ云ク云ク、古事記古事記傳デン十七十七の十六十六丁丁ふ、凡トて書
と、是レらノ其ノ期キハ、漢文漢文の格カクふハ違ヒひク古コ言コト乃ナリ例レなり、
と、取トルるハ返マゼりトか、よき事コトも何ナなり、
あ、万葉十三万葉十三丁丁ふ、衣キヌ社ヤ薄ウソク其破ハ者モノ伊勢物語伊勢物語ふ、女御高子メノタカコ
と申マシ、以モ備ヒるハか、りナるハ、それ失ウシ給タマひクと何ナ、
以上以上古古説説

形久源氏物語花宴卷 八 戸と云、是形久、ゆきが苦
留留ハ瓊と繫ソナル多緒と繰解給ふと云、形久ハ此、紀
書と違ひ、と字を用ひらき、故に訓も誤る事 ○五
多、とら、の輻輳然も常に見やれぬ字なり、
百箇御統今本御字と脱せし事上 訓考六卷 五十五丁 云久、○
瓊倫ハ、多麻能衰、○解而ハ瓊付、緒と繰々ハ繰解而
や久、○瓊響瑤瑤、と、の瓊響と奴儼等と云事ハ古事
記傳四丁六七丁、やとみ出で、瓊之音や久はく母ハ辭ハ
て、母由羅ハ其處ハ出で、緒ハ貫了瓊共此動ハ相觸つ
つ鳴状と云、又母ハ眞の意ハ和と何久、今按ハ母ハ眞
の意ハ和ハ無ク、小の意ハ久、その大き形ハ久、小ハ由

羅由羅と鳴音形久はく小きと佐と云、久ハ上 訓考六
丁ハ出、此佐と麻と通ハ、佐袁鹿と古事記 石屋 久ハ
眞男鹿と何久、又万葉十八丁 廿六 久ハ左度波世流と何久
と、同略解ハ是ハ迷ハせしやうりと何久、此餘ハ佐と
麻と通ハ、事多トはく其麻と又母ハ通ハ、と云、
形久古事記曰、得三貴子、即其御頸珠之玉緒、母由良通
取由良迦志而、下二卷 丁 廿一 久ハ手玉玲瓏織紐之少女者
万葉十丁 卅 久ハ足玉母手珠毛由良爾織旗乎、旗ハ借字ハ
十三丁 八 久ハ手二卷流玉毛湯羅爾やど何久、○天淳名井
上 訓考六卷 久ハ出、○濯浮ハ、上御誓段、本書又一書共ハ
廿五丁

濯也布利須々岐と訓るも依又淳也布利と訓事上同
卷五下出○之○而も捨づ○右瓊端字今本下無
上も瓊端と何るも依今補ひ然瓊ハ乃山蔭ハ略き
過たりハハカふもふくとも蓋右○之○而も捨て○武
藏國造古事記ハハ牟邪志國造と何る武藏ハ古事記
傳廿七七十佐志ハ國名も駿河相模武藏の地也
也れハ相模ハ相模ハ身佐上武藏ハ身佐下也
武藏と書きハ續紀六丁三和銅六年五月ハ畿内七道
諸國郡郷名著好字延喜民部式ハ凡諸國部内郡里等
名並用二字必取嘉名と何るやどハ依てやハ此紀ハ
和銅六

年の後ハ撰古事記傳七九丁ハ牟邪志ハ武藏と書き
ハ正々其名ハ當るハ得難けきハ近き字音と取
きハ何ると何る下廿三卷丁廿五卷丁廿七ハ身刺と書
きハ人名見也ハ如ハ牟ハ古事記傳ハ云國造ハ古事
記傳七丁八十ハ久爾能美夜都古と訓べハ其由ハ上代
ハ諸仕奉人等と惣擧るハ臣連伴造國造と並べ云
ハ云云國造ハ諸國も其國の上と云ハ各其國と治
る人ハ云ハハ造ハハ部ハハ三枝部ハハ言ハハ云造ハ
諸部ハハ上と云ハ各其部ハハ掌ハハ人ハハ云云造ハ
義ハ御臣ハハ林德紀詔ハハ貞久淨伎心ハハ天朝廷ハ
御ハ止奉仕ハハ米天云云と何る也ハ以て夜都古ハ臣乃

意ある事とある、本然云云、夜都古と云ハ、甚賤き者の如く聞ゆ事とあり、云云、夜都古と云ハ、甚賤き者の如く聞ゆ事とあり、本然云云、夜都古と云ハ、甚賤き者の如く聞ゆ事とあり、云云、天皇乃御臣と云、其國々治る人、國御臣と云、云云、さく國々宰と置き、後國造ハ國司の下に立て、多々郡司の國造、絶て今世は漸々衰行て、後世は遂に國々の國造、絶て今世は漸々衰行て、あるは出雲さく紀國、出國造本紀ハ元邪志國造志賀高穴穗朝御世出雲臣祖名二井之宇迦諸石之神狹命十世孫兄多毛比命定賜國造と見ゆ又下十八卷五武藏國造笠原直使主同族小杵相爭國造と云事ハ、武藏國造笠原直使主同族小杵相爭國造と云事ハ、久、久、笠原と云直とハ、久、笠原と云直とハ、茨城國造ハ、常陸國風土記ハ、茨城國造初祖多利古呂命仕息長帶比賣天皇之朝と何より和名抄同國ハ、茨城、良波郡是形ハ、是ハ宇波

と音便ふきて姓氏錄未定ハ、茨木造、天津彦根命之後也、又大和國三枝部連額田部湯坐連同祖、天津彦根命十四世孫建許呂命之後也、此十四世ハ古事記傳ハ引やどやり、額田部連ハ、姓氏錄左京ハ、額田部湯坐連天津彦根命子明立天御影命之後也、允恭天皇御世被遣薩摩國平隼人復奏之日、獻御馬一疋、額有町形迴毛、天皇喜之賜姓額田部也、古事記傳ハ、七十町方ハ、田の町の形也、又額田部、天津彦根命孫意富伊我都命之後也、大和國額田部河田連、天津彦根命三世孫意富伊我都命之後也、允恭天皇御世獻額田馬云云、仍賜姓

額田部連也、又河内國額田部湯坐連、天津彦根命五世孫乎田部連之後也。同書額田部宿祢とあり、古事記にも天津日子根命者額田部湯坐連之祖也とあり、又舊事紀ふ、天斗麻弥命額田部湯坐連等祖とあり、天斗麻弥命ハ、姓氏錄攝津國天孫、天津彦根命男、天戸間見命とあり、是あり、此中湯坐連と負ハ、此氏人の中ふ、湯坐乃事乃由ふ付て、別ふ給り、姓あり、べし湯坐ハ、下訓考十五卷ふ云、べし、古事記傳七ふ、下十五卷十九ふ、倭國山部郡額田邑、和名抄ふ、平群郡額田郷、今此郡額田河内國河内郡額田郷とあり、是ら

氏錄の説の如く、此姓より、神名帳ふ、伊勢國桑名郡出た、地名ふ、猶尋め、神名帳ふ、伊勢國桑名郡額田神社あり、同郡多度神ハ、此天津彦根命をれば、此社も此姓よ由り、べし、又類聚國史ふ、額田國造と云、姓の人も何り、此ハ同姓と出、活津彦根命今本活の下ふ目字何り、髻華山蔭ふ、目字先ハ、衍と見ゆ、と決り、此字無き本も何きと、そのゆゑ、らよ削き、とあり今按、活目津彦と云、古書不見え、行ハ、今ハ除、猶後人考、ハ、燖速日命及此子等の中ふ出け多ハ、誤、事上訓考六卷、丁ふ云、熊野大隅命ハ、上御誓段の本書ふ五十七

熊野櫟樟日命又の一書ふの熊野忍踏命と何久名義
大の於保志隅の上の樟日ふ同と古事記傳七ふ出○
六男の誤ふく五柱成坐幾と訓事上訓考六卷ふ云○
所以更昇來者昇來ハ麻爲久流と訓べ○處ハ以
根國より返り不夜良比幾○今ハ志加礼杼毛當就去
若不與此中乃若と與ハ捨て當就去ハ麻加良婆と訓
○終ハ捨て○不能忍ハ志奴毘兼牟登思比豆古曾と
訓べハ忍ハ上訓考五卷ふ出此ハ堪忍ぶなり○離○
實○復ハ捨て○上來耳ハ參上利幾都礼と訓るハ上
の不能忍の結わり耳と幾都礼と訓事首卷ふ云○

今ハ捨て○奉觀ハ麻美曳豆婆○已訖ハ更余思保須
事奈志○當ハ以麻波○隨ハ意より返り不麻々余と
訓○自此二字捨て○永歸永ハ上一書ふ急と何
ふ同ハ登保久歸ハ麻加利奈牟と訓べ此ハ歸字と
幾鳴尊初根國ハ降坐ハ姉尊ハ相見むとて天子參
上坐て今又根國ハ歸給ふ故ヤリハ舊説の如
く根國と黄泉國と一形らむハ穢とヤリ給ふ事如
く又根國ハ黄泉國ハ出雲の國○請ハ捨て○姉ハ
美麻志尊○天國ハ阿麻能波良と訓べ此ハ天ノ事
高ハ照臨ハ此照字ハ漢文例ハ書きヤリハ是ハ
云々○照臨ハ天照と申モ照ハ同トヤリハ是ハ
言と云々漢意ト由ルキ事ハ古志良志豆と

訓べし。○自の捨て。○可平安の麻佐幾久幸久坐麻勢
と訓べし。麻佐幾久の麻の真も、稱て云言佐幾久の
古事記傳十七丁二ふ、凡て身の爲ふ吉き事と云とあり、
然き此の天照大神ふ吉くて坐坐と申し給ふなり、
万葉二丁廿一ふ、真幸有者三丁廿二ふ、吾命之真幸者九丁
ふ、吾思吾子真好去有欲得十五丁四ふ、真幸而伊毛我伊
波伴伐十七丁廿一ふ、麻佐吉久登伊比底之物能乎廿八
丁ふ、麻佐吉久母波夜久伊多里互、中と重て云、了例ハ
十三丁十ふ、言幸真福坐跡やどあり、あく言と重て云、了
ハ古の雅言なり。○亦の捨て。○奉於姉の六男と奉

らむなり、はく物實と替て、男神と素戔嗚尊の御子と
せし傳の異なり事上訓考六卷四十一丁ふ云、り、世人舊事紀と
尊信て、専ら其紀よ依て、何事も云、了事なり、ふ、此異
なり傳と誰一人も云もせ、又信得ぬ、かむり、き
事なり、なり、何を尊と、何をか、ふ。○己而の申志終利
互、○復の都比余と訓て、○還降馬の出雲國ふなり、
記傳八ふ云き、さる如く、此一書の初終行通てよく聞
ゆふなり。○訓注ふ瓊響瑤々とあり、處瓊響二字と今
本脱せり、今加ふ、又乎奴儺等母とあり、乎ハ、髻華、山陰

ふ上乎謀苦留留爾の乎より混清マキレ不此コふ
も書マ了マや多マぶマと何マり今マの捨マてよマるマん

日本書紀訓考七卷終

